女鑑

明……月十五日發行

第六十八號

東京國光社

女鑑第六十八號目次

江口さき子



女鑑

日本婦女今日の務

今日の我が日本帝國は、既に、平常の日本帝國にあらずして、非常の日本帝國なり。隣國の平和も一朝にして破れ、我が忠誠勇武なる海陸の軍隊は、我が大君の御言を畏み、海に航して、韓土に渡り、戰は、既に、開け、連に、勝利ありしも、我が親愛なる同胞は、砲煙彈雨の間に、死傷したるものも、亦、既に、多しと聞きぬ。然して、勢は、未、如何に變ずるやも知るべからざるの有様なれば、此の上、幾何の同胞を失はんやは、豫め知るべからず。是、豈、容易の事ならんや。抑、我が帝國の臣民たるものゝ、國家の爲に、其の身命を非常の時に致すは、固よ

り、其の本分なれば、苟、一人の兵役に服せざるものなく、既に、事あるの日に當りて、其の忠勇の氣を勵まし、帝國の國威を海外に耀かすは、軍人が當然の務を盡くすものなれども、而かも、吾人、同胞の愛情より之を觀れば、其の艱苦慘狀、果して如何ぞや。生を享くるは、皆、同じく、而して、其の境遇の異なること、斯くの如きは、豈、哀痛悲歎すべきの至ならずや。然れども、男子、軍に赴く、固より、生還を期せず。されば、徒に、之を悼み哀しとも、更に、何の効かあらんや。吾人は、軍人の庇護に依りて、此の生命を全うし、同胞の扞衛に依りて、安居することを得るが故に、須く、之が報答を計らざるべからず。吾人が、同胞に盡くすの道は、全く、此にあるなり。吁、是、特、男子のみにあらず、婦女子、亦、同く然らざるはなし。

報答を計るの方法には、種々の良策あるべしと雖、吾人の見る所を以てすれば、國家、自、成規ありて、漫に、從軍することを得べきに非ざれば、唯、各自の業務に熱心勉強し、而して、彼の從軍の勞を體し、其の力に應じて、贈遺を爲し、以て、彼の勞を慰し、又、彼の死傷者の家族を救養存保するの策を取ること、最、適當なりと信ずるなり。而して、婦女子の事業として、最、其の急務たるを信ずるなり。何となれば、女子は、同く臣民にして、而かも、兵役の務なければなり。吁、今日の婦女子たるもの、宜く、其の力を此に盡くすべきなり。

若、夫、其の方法の如きは、或は、看護婦となりて、現に創痍を救ふも、可なり。物品を製して、之を贈るも可なり。金員を醵して、遺孤家族を養護するも、亦、可なり。是、以て、外征の同胞をして、内顧せずして、其の務を盡くさしむべくして、乃、亦、國家に盡くすの道に適ふべきことなりかし。

論說

徳川時代女子教育史評論（五）

岡崎遠光

二、同時代女子教育の要概（下の一）

封建時代に於いては、立法、行政の機關、整頓せずして、其の教育の制度の如きも、極めて、不完全、不規則に、且、地方の小君主、其の心々によりて、其の士民の子弟を教育せしが故に、今日より、其の教育の有様を討究するは、事、容易に似て、而して、却りて、困難甚しきものなり。江戸の昌平黌の規則を見たりとて、地方の弘道館、明倫館も、此の如しとは、像想せられず。勿論、主眼の課目は異なるなきも、所謂、仕立方に至りては、各々、殊質ありて、一を以て、十を律すべからず。然るに、女子教育に至りては、其の教育の方法が、不滿足の點少か

らざりしにも拘らず、大主眼も、小目的も、六十州を通じて、一様なりしは、又、古の男子の教育法と、女子のと、異なる點なり。中村惕齋先生の姫鑑や。貝原益軒翁の女大學は、何處へ行くも、歡迎せられて、七去、三從の敎は、たとひ、其の理論通りには、實行せられざりしとはいへども、何人も、かくの如くならざるべからずとなしぬ。又、貞、淸、美、譜、胎の五德も、德、言、容、功の四道も、女子家庭の躾方として、一般に、其の長上が、朝夕、口にする處なりき。殊に、技術遊藝に至りては、其の子女が修習すべき課目は、皆一樣なりしものゝ如し。

されど、茲に、封建時代の特產として、數ふべき事は、如何なる身分の婦人たりとも、德育の方針は、異なる事なかりしも、安心立命の地を設くる點に至りては、甚だ、差等ありしこと是なり。即、諸侯卿太夫の婦女は、士班のと異なり、農人

の婦女は、商人のと異なりて、上は上らしく、下は下らしく、おのがじし、敎育養成せり。今日にても、其の傾向はありといへども、古は、殊に、其の墻壁を立てし事、甚しく、商人の女子は、士班の男子と結婚するさへ、容易ならざりし有様なりければ、農人の婦女は、幼き時より鍬を執り、蠶を養ひ、農人風の薫陶を受け、武士の娘は、又、鎖鎌を振り、薙刀を使ひ、武士風に、敎育せられぬ。

今、古の人が、書き遺しゝ、水茎の跡をたどりて、其の階級によりて、所謂、躾方が、如何に、異なりしかの一班を、尋ぬべし。さて、『昇平夜話』といふ書に曰く。『諸侯の奥方は、定りたる、家の課業もなければ、朝甚だ遲く起きて、髪、化粧等に午前を消すものなり。君主東上の時は、一入なり。富貴の人の、奥方は、慰みとして、筑紫琴は可なれど、手自ら三味は用ふ可からず。子供の成長の後、

衣服の善悪に目付き、其の好を女めき、或は、ざればみたる模様、又は、時の流行模様如きの好みあるも、其の初め、奥にて婦人の手に育ち給ふ弊あり。七歳より、男女席を同うして、並び坐せず。食を共にせざるは禮なり」此の文より推索する時は、世の昇平に流れしより、上の方々は、安逸を事として、家の園生も、荒み果て、其の子女の躾方は、侍女妾媵に委ねて、顧みざりし有様と覺らる。尚、臣下に對する言語動作は、さあれ、朝夕の課業はしか〴〵と古書に見ゆれども、其の言、多くは、其の身一個の修身上にとゞまり、たとひ、廣くするも、一家の内に過ぎざりき。又、父兄は、其の子女を遣すべき學舍なかりしゆゑに、大抵、師匠を家に招きて、文藝禮式を敎へしめたり。禮式には、伊勢、小笠原。文學には、源氏、古今の類。技藝には、音樂、裁縫など習はせたれど、是等も、

甚、窮屈なる習ひ方なりし故に、其を學修したりとて、充分に、活用せむ事、覺束なき次第なりき。但し、和歌と、書畫とは、彼等が、無事に苦みし結果として、頗、斯道に堪能なる人の少からざりしは、日本婦人の心は、外國の婦人のと異なりて、美の思想に富むと、二つには、當時婦人唯一の名譽は、三十一文字を以て得られしとが、又、其の源因なりしならむか。今日の上等社會の婦人を見渡すも、朝に音樂、夕に和歌、兎角、優美に傾く有様あるより、推して、封建時代の婦女子を想へば、彼等が、深窓の下、何事を學びて、三百六十日を過ぐし、何業を勵みて、五十年を送りしかを、判斷するに難からざるべし。

享保十七年の頃、淨珠院嵐子といふ貴婦人が、其の娘子に與へし『もしはぐさ』といふ書一巻あり。女子たる者の修身、齊家の道を說きて、神、儒、佛の三道を

も論ひし文なり。此書に據る時は、當時の上等社會の女子教育の詳細を知り得らるべければ、心あらむ者は、是非一讀せよ。予は、後文に於いて委しく評論する事あるべし。

次に、維新前に於いて、中等の生活をなし〻、士族社會の婦女の躾方を調べ見るに、此の階級が、最も、其の子女の養成方に注意せり。女子の讀本類も、商估の賣先と思ひしは、士族の家なりき。又、其の讀本類を著述せし學者も、大抵、此の階級の人なりしなり。『朝顔よつるべとられて貰水』の傑作を以て、三歳の小兒にも、其の名を知られたる千代女其の『四民論』に士族の女子の覺悟を說きて曰はく、『男に、四民あれば、女も、亦、然り。士は、亂れたる世に、逆ふを伐ちて、靜謐となし、治る世には、暴を禁じ、賊を誅し、萬民を安堵なさしめ、文

武を以て、治亂に處し給ふ、君に近侍し、共に、其の事にあづかる故、三民の上に在り。されば、士の妻たり、女たるものは、風俗、髮貌、立居振舞、言葉をたしなみ、人柄よくあるべし。形態の婀娜たるを好むべからず。悋氣の心は、其の身の、愧なるを辨へ、夫に、心得違あらば、詞愞かに、よく〳〵諫め、萬一、不幸にして、危難ある時は、身命を惜まず、舅、姑、夫に先ち、貞烈の操正しく、いかにも、士の妻ぞ、女ぞ、といはるゝ程に、ありぬべし』といへり。さて、男に、四民あるが故に、女にも、四民あり、との論鋒は、他の詞にては、男に、四民なきが故に、女にも、四民なしともいはるべく、正しく、女は、男のまに〳〵、其の身分を定むといふ儒教主義の議論なり。否、儒教主義のみならず、男剛に、女柔に、一は先むじ、一は隨ふは、抑〻古事記にも、見ゆる、我が國の本道なり。

殊に、形態の妖美を避けて、精神の眞美を勸めし處など、其の子女たる者の、行ふべき、普通の事なりとするも、「遊民」視せられし、俳家の口より出でたりとすれば、其の論者の心情、宜しく大丈夫を以て、擬すべきなり。明治の昭代、此の如き女、有りや、無しや。

女子處世論（七）

三輪田眞佐子

第八　婚姻及婚姻の後

折しも、三伏の頃になんあるをもて、定めて、學校にある處女も、家國まをる婦人も、自然、定時、休暇と思ひて、各、其の執業も緩ならむ。こは、固より、よし、希はくは、快く、體養せね。されど、亦、この頃は、我が國と、外つ國の間に、

異事ありとかや。誰か、心ある女子、「身につもる年に萬代とりそへて今日わが君に奉るかな」と歌ひし康資王母と、同情を表せざるものあらん。去月、末つかたの日本新聞に、勢州舊久居藩士の、三好とぞ聞えたる家の孫、兵士となりをるより、一朝、事あらんには、彼の國にも、行かん由を書きて、故郷なる祖母の許へ送りしに、祖母は大よ、打ち喜び、今こそ、御國に報ゆる時節なれ、故郷の事、な憂ひそ、いでや、雄々しく進みて、家の名をも起せかしと、祖先傳來の名刀まで、取添へて、返り事せしとぞ。實に、斯かる女子ありてこそ神州の名に背かざれ、豈、平々凡々として、休暇とのみ思ひ、國を忘れ、身を忘れつゝ、蒼蒼たる蕉陰にて、午睡をのみ貪るべけんや。正に、諸の姉妹は、休暇を、徒然なる日とのみ思はで、明月を眺めんとて、山の麓に行くものは、沈思し、涼風を受

んど、河の上に立つものは、默想すなど、充分に心術を研き、以て、處世に必要なる理想心を養へかし。

おのれが、恒に、天下の姉妹に望む所は、斯の如きことよしあれば、今回とて、決して、世俗に諂り、一時の快味を感ずる謔戲の文、あるは、浮薄の文句を掲げて、暑氣を忘れしめんもがなとは言はじ。故に、以下女子に、尤必要にして、而かも、國家に、少からざる影響を及ぼす、婚姻に就き、腐言を陳べん、されど、此の事項につき、婦女たるものは、互に、同情を催し、胸も裂けんばかりの思あらむも、男子は、之を些事と看過すらむと思ふなり。故に之を讀まん女子は男子めきたる心に持ちぞ。

抑、婚姻は、一男一女が、苦樂を共にする目的を以て、偕老の契をなすものなれ

ば、大に謹むべき大事にぞある。從ひて、女子は、婚姻以て、略、異日の幸不幸をトし得べしと言はんも、過言にあるまじ、故に、女子たるもの丶、處世の道を講ぜんには、婚姻を以て、最、重大なるものと考へざるべからず。

婚姻の種類と、儀式に就きては、既に、女子要言に於いて、所謂、贈與、結婚、及、處女の協諾結婚とも言ふべき、現今、我が邦に行はれつゝある、制度、及、習慣は、敢て、問然すべきものにあらざることを論じたるを以て、省きつ。今、婚姻するに當り、女子の財産の關係を考ふるに、西洋の女子は、大抵嫁する時(ダワー)と稱し、一種の持參金を携へて行くとぞ。されど、斯かる風習は、儒學の主義に反對するめり。文仲子曰ひけらく、婚姻而論財。夷虜之道也。君子不入其郷。古者男女之族、各擇德焉、不以財爲禮。と。蓋、未、聖賢の域に達せざる者は、

多く衣食足りて後、禮節を知るものなれば、女子も日本の習慣に從ひて、分限相應に、衣類等を調ふべし。然らざれば、圓滑なる生活をなし難からん、強ひて西洋主義に偏し、漢土主義に傾くを要せず、唯、神代より、道定まれる日の本の習慣に從へかし。

されど、奇を好むは、人の恒なるにや、この頃、我が古代は、自由結婚の風俗ならん、と言ふ人あり。其の証據として云ふやう、昔、婚禮の事を、(ヨバヒ)とぞ云ふめる、こは、(呼ぶ)との義にして、其の頃の風俗に、歌垣と稱ふる遊戲ありけるをもて、若き男女、互に、和歌をよみ、懸想の意を通じ、始めて、夫婦となりたることを見れば、自由結婚に近し云々と。おのれ、痛く、そを邪説と思ふなり。抑、上古に、歌垣のありしことは、事實ならむも、今日妄想する如き、亂行を極

めしものにはあらざりけん、さなくば、焉ぞ君子國と誇るを得ん、若、之を疑ふものあらば、國史を繙け、されば、かしこくも、神武帝の三輪の五十鈴姫と會合せさせ、歌垣を以て、皇后となし給ひしも、大久米の命、之を媒酌なし奉りしにはあらざる乎、之を自由とやは申し奉るべき。殊に歌垣のとき、男子より、女子を呼ばんも、女子は、必、我が父母、あるは、兄よ、諮れよかしと答へて、恰、今日行れをる、父母と、處女と、協諾の完全なる結婚と、異なるなきを悟り得ん。亦、歌垣のときとても、決して、女子より、男子を呼び初めざりしことを忘るべからず。こは、諾册二尊の、八尋殿の柱を旋り、結婚せさせ給ひしとき、男神、先、唱へ、女神、之を和し給ひし訓令あればこそ。蓋、人事制度の變更も、必用あれば、固より、なすべきものならむ、然れども、徒に外つ國ぶりに倣ひ、國風

を亂すは、何の心ぞや、女教と、邦家とは、いと大なる關係あるをもて、眞の愛國者は、豈、女教を忽にせんや。

亦、思ふに、西洋は、多く、分配主義に由りて、財寳を、其の子女に分與するを以て、女子たりとも、應分の分配を受け得んも、日本は、長子相續なれば、女子の如きは、西洋と、一様になすことを能はざるべし。されど、此を以て直に、日本女子は、不幸なりと言ふべからず。何となれば、財産を有して、嫁するときは、反りて、不幸の基となることもあらん。そは、嫁するときは、固と、女子は、良人の家を、自分の家となすべきものなりせば、支那には、女と云ふ字と家と云ふ字を組みて、嫁といふ字になしゝとかや。然るに、若し財産を多く所有する女子は、之を、自負し、良人の命に抗する如きことありて、安心なる生涯を送り、能

はざることあればなり。要するに、日本國風の許す限りは、相當の財物を所持すべし。そは、奢侈と、高慢をさへ戒めなば、萬一の秋に、こがため、自、救はれ、且、夫を助け得べければなり。凡、唐土の風は、女子の不遜を抑えんとなしゝ故、女子に財産を與へず。西洋の俗は、女權を尊びつゝありし故、女子に財貨を與ふめり。獨、我が國は、偏せず、僻せず、中庸なるかな。昔、山内一豊の妻、其の嫁せしとき、父より、金圓を得て、鏡の底に納むること久しかりけるが、一日、其の金圓を以て、良人の爲め、名馬を求め、良人、及、織田氏の光榮を增さしめ、もて、遂に、良人をして、信長公より、千石の俸錄を受けしめ、良人をして、嗚呼、これ、卿の惠なりと、感泣せしめし美談は、知らざるものなからしむ。諸孃、之に倣はんと、願はざる乎。

史談

江口とき子

塩井雨江

九重の玉がき深く、大内山の天つみ日つぎの、長にめでたくまします事は、遙に天神の御心を寄せさせ給ふ所。今更に、賤しき者の、輕々しくいふべきものにあらねばいはず。我敷島の日本島山が、日月の長く、万國の多きが中に、能く獨得の名を専にし、唯一の稱を擅にし、天地に誇り、宇宙に大言して、恥かしからぬものといふは、富士の高峯の大空に輝く姿。みよし野の山櫻朝日に匂ふ色。ますら男の、手束の弓の束の間も、本末を忘れぬ敷島の大和心。をとめをみなが、着ならしの袖つけ衣、もろ袖にこぼれて匂ふ優に柔しき女徳。これや、誠に東洋の禮義國、玉鉾の道ありとしいはれたる我國が、三千年古來の特色、万世に比なき姿、宇宙に誇りたるもの。

富士の山光は、なほ動かず。みよし野の花色は、いまだうつらず。ますら男が手束の弓は、手をはなれたるも、敷島の大和心は、劒大刀、さすがに失せもはてず。頃

日、國のため韓山の蠻荒を踏み、毒霧瘴氣の間に露宿して、なほ起臥に故郷をふしおがみ、君恩に感泣する士あり。又、僅に一艦、豊島の激浪を凌ぎ、彈雨硝煙の間に勇鬪して、淸の二艦を破り、淸の一艦を捕獲したるの士あり。盛なるかな其の士氣。快なるかな其の士風、敷島の大和心、なほ、昔日の餘風の、万國に誇るべきかげの殘れりといふべし。いま、又おなじく三千年古來の特色、優に柔しき女子の風姿をそなへ、富士の山光の動きなきかげ、みよし野の花色のうつらぬ姿、しきしまの大和心の餘風にたくらべ、劣らず恥ぢず、諸共に万國に誇るべき一女子を得たり。

女子は、名をときとよび、筑後の國三潴郡矢加部村といふ所の人なり。父は、江口正松といひて、朝夕にすきかへす田畑の草の、ものゝかずにもあらぬあやしき賤にて、山田の庵のさゝれ水、あるかなきかに世に住めるものなりけり。とき子が柔しき心根は、生れつからなりけむ。嬰兒なりけるほどより、世の乳のみ子の、母の乳にのみ泣きすがり、母の手下にのみ泣きむづかり、夜も終夜いねず、晝もひねもす暇閑なく、母の心を痛ましむる如き事、絶えてせず。七八歳となりては、いはけなきふりわけ髮ながら、道わかず泣きさやぎ、道理り知らず恚り狂ふ如き、大かたの

壁には似ざりけり。晝は父母の農事に伴れ立ちて、田畑に遊ぶも、徒らに花のみをあつめず、蝴蝶にのみ戯むれず。父が刈り殘したる小草をひき、母があつめ落したる菜穀を拾ふを樂みとし、夜は、父の膝下に、文字を習ひ讀書をおぼえ、母の糸とり麻うむ邊にかしこまりて、女子の道を尋ぬるをよろこびぬ。

とき子が柔しき心は、千重八千重、深きが上に深くなりゆき、朝は自ら鋤鍬をかたぎて、父母を田畑に送り、夕には簀の子の塵を掃ひて、父母を門に迎へ、心なき年並に、心の限をつくし、いたらぬ年齒に、力の限をいたしたる孝心、いかなる父母か悦ばざるあらむ。とき子が父母は、誠に白銀黄金寶玉を得たるにもまされる思ひ、貧苦もうちわすれて、悦ぶ事大方ならず、とき子〳〵と左右を放たず、いつくしむに、とき子も亦片時膝下を去らず、父よ母よといとほしみたり。されどにや、とき子が家、かきは破たれど、春は花靜かに、軒朽たれど、秋は月すみよかりけり。されど、無殘の風は、花の深きほとりにしげく、無常の雲は、月のさやかなる空に多し。とき子か家、ゆくりなく風雲のさまたげにあひ、母なる人、春秋わかくありながら、いつしか無常の客となりて、歸らずなりぬ。老樹萎草も、枯落の聲をきゝ

ては、誰か風聲を悲まざらむ。うちよする年浪なればとて、無常の淵にくだけては、誰か水色を惜しまざらむ。ましてや、人は老樹にあらで枯れ、よる浪ならでくだけぬ。孤は僅に十二歳、されど人にすぐれて、ものを思ひ、人にまして、ものを悲しむとき子なり。思へば、風樹のなげきも、東流のうらみも、尋常の聲にあらず、一樣のいろにあらざりけり。

とき子は、母のむなしき亡骸をかき抱きて、母さまよ、かなしや、ものいひてよ、きかせてよ、母さま。父上と物語り給ふ言の葉をきかれずならば、ときやとよび給ふ御聲きかれずなりては、父上も悲しからむ。今より、ときも、何をか樂しまむ。母上と、つねのやうものいひてよ、きかせてや。のふ母上と、くりつかへしつ、かきくどきかきくどけども、いふ方もきく由も、絶えてあらねば、はては絶望の域にふしまろびて、よゝと泣きぬ。泣けどもだゆれど、悲しさは堪へず。又も、引けど留むれど、甲斐なき母の諸手に取りすがり、母さまよ、なさけなや、のう歸へりてよ、去なでよ、母さま。いまより、父上は誰と共に田草はひき給はむ、刈穗や結び給はむ。母ならで、とき子は、誰を習ひて、明日より、糸や繰む、麻やつむがむ。まし

てや、悲しきは、幼き妹弟。たらちねの母のみ庭の露かれては、撫子の、何を頼みて、いかにかならむ。撫子をあはれとおぼさむ、露のまも、此處をな去でよ、見捨てでよ。母上と、引きつすがりつ、かきくどきかきくどけども、人は絶えて引くよしも歸すすべもあらねど、又も絶望の域にふしまろび、ふしまろびてよゝと泣き、さては、妾も共に伴れてと、亡骸にすがりて離れざりしころ、やさしうあはれなりしか。

母の亡くなりてより、とき子の柔しき振舞は、書くも語るも、唯感涙の先立ちて、筆も辭も、思ふやうならぬぞかりや。母の忘れ形見なる妹弟をいつくしむ事大方ならず。妹はやう〳〵六歳、母の袖を離れては、なほ、あさぢが原の雨風を凌ぐべくもあらず。わきて、弟は僅に二歳、慈母の懐なくては、玉の緒のよる方も無きぞかりなるを、とき子、姉とはいへど、僅に十二歳の女の童なるに、弟を背おひて、遠近に乳を貰ひありき、二葉の小松に、千代の根ざしを怠らず。妹をみとりて、左右を離れず、まだ世になれぬわか竹の、起臥に心を添へ、妹のため弟のゆゑを思へども、我身もおぼえず、我心もうち忘れて、まめやかにかなしう、もりそだてたる友愛の切

なる。これきくだにも、やさしさめでたさ、おぼえず感涙幾雫なるを、とき子が可憐の赤心は、唯に幼き妹弟に留らず。母ありてだに、瘦田の困苦、さぞかりなるに、鋤くもかへすも父のみの身一ッ業、必ずや身にあまりてならむと思へた、務めて父の營みを助け、父の困苦を勞り、父の悲嘆を慰むるを心がけたる孝養の深さをきゝては、感涙盡くる方なくおぼゆるを。またかのみならず、母なくなりてより、日毎必ず弟を背おひ妹を携へ、母の墳墓に詣で、花をそなへ香をたき、あか井の水の清きを手向け、二時三時暮前にむせびしといふをきゝては、感涙そこにむせびて、又言の葉もいでぬ思ひす。

父なる人、やがて後妻を迎へしが、とき子は、實の母の亡くなりたるが、再び歸へれるばかりに打ちよろこびて、事毎に敎へを仰ぎ、もの毎に思ふ所を尋ね、そむかじ戻らじとばかり、かしこみて、敬ひかしづく事、實母のむかしに變らず。朝の營み夕べの業も、自ら晨に起き夜半にいねて、決して繼母を煩はさず。麥をひき稲をうつより、糸をとり麻をつむぎ、布を織り衣を縫ふ業に至るまで、女子の爲すべき事はいふに及ばず、自ら鋤鍬をとりて、父が田畑の業を助くるさへ爲したり。げに

や、けなげなる少女の心情。父母には朝霜夕露をいとひて、自らは晝夜をわかたずいろしみ働き、父母には寒意暑氣をいとひて、自らは炎熱風雪を辭せず衣食の業薪水の營みに、辛勞を盡くしたりといふ。年齒をとへば、芳記二八。容姿をきけば、花顏柳髮。徒らよ風雨にまかして、粧はず櫛づらずして恨まず惜しまず。唯恨む所は、父母の衰貌。惜しむ所は、父母の白髮のみ。思へも可憐可愛のとき子。

とき子の伯父新谷忠藏といふが、おなじ矢知部村に住めるが、とき子の柔しき振舞を慕ひ、是非に其子爲次郎といふ者の妻に貰はまほしき事を乞へり。とき子の父母も、兼て爲次郎の人物を知れるものから、似つかはしき緣なりとて、早速に結婚を約し、引出物さへ互に取りかはしたれど、未だ婚儀をあげざりしほどに、伯父なる忠藏、ふと病の床にうちふしたるが、等閑に思ひたるも、容易く癒へず。なかなかに烈しくなりゆき、熱さへさし加はり、世に恐ろしき熱病となりぬ。

伯父の家も、又朝夕の煙、有るか無きか、おぼつかなく、柴のとぼそのあけくれ、心細き年月を送る者なれば、餘有といふもののあるべきやうもあらず、僅の家財は、忽に忠藏が醫藥の代となり、爲次郎は、父の介抱幼き妹弟の看護に、終日終宵休む間

寢るひますらだにあらねバ、家業はえせず。費用の出づべき道もなけれど、一家の難義いふべき方も無きぞかゝりなりけり。

とき子が柔しき心は、斯くときくより、外にはすぎず、思ふには怺へずなりぬ。父にうちむかひ、看病に行かまはしき由をつげぬ。父は、とき子の志を、道理と思はざるにあらねど、熱病の傳染しやすきを恐れて、行くをゆるさず。熱といふ病は、必ず近きに傳染るといふに、介抱にゆかむこと、いと〳〵危し。汝と爲次郎、此頃結婚すべき約は結びたるも、いまだ儀式を擧げず、誠に嫁ぎたりといふにもあらねど、よしや暫時介抱にゆかずとも、義理に遲る事も無からむといひて、許るさず。とき子は、父の言葉に、唯々とばかり、かしこまりてきゝたるが、何思ひけむ、いよ〳〵かしこみて、ものしづかに父にむかひ、父上の仰せをかへし奉る罪は、山嶽の奥牢海の底、身を入るゝべき方もおぼえ侍らねど、妾が志のほど、今一度きかせさせ給ひてと、言葉しとやかに、父上の仰せの如く、いまだ嫁ぐことを爲し侍らねど、妹背の約を結ぶとの仰せ侍べりし日より、さては、伯父御御父子こそ、わが夫なれわが舅なれ。よしや此のまゝ山海を隔つ事あるも、遂にあふ時なくなるあるも、天地

の間宇宙の限、わが夫わが舅といふべき人は、其の人ならで他には在らじと、固く心の中に思ひ定め侍りぬ。山海にへだて千里にはなれ、諸共に住むといひ住まぬといふは、唯空蟬の殼の身のみ。心の中には、山海も隔てず千里もわかたず、何時はわれ何處はわれ、伴れでやあるべき。されば、形は名のみ、心こそ實なれ。心に結びたるが、誠の夫なり誠の舅なり。其の人の悲嘆きかじと思ふも、妾はきかざるをえせず。其の人の苦痛見まじと思ふも、妾は見ざるをえせず。悲嘆をきゝ、苦痛を見、餘所に過ぎむ事、妾は絶えて忍むじ。しかのみならず、さきつ年、母上の病ひて亡くなり給ひし時、病床の介抱醫藥の世話より、野邊の葬り忌日の營みに至るまで、伯父御の心痛焦慮は、いふもかゝりもあらず。薪をわかち炭をさきて、家の事母の身、何くれとなく、懇に力を添へ、心を懸け給ひし恩義は、妾が少女心よも、身にしみわたりておぼえけむ。けふまで四年五年、起臥忘るゝひまなきむかりなる人の恩義も、むくはまほしく思ひ侍るに、曲げて仰せをかへし奉る罪をゆるされねといひて、ふし沈めむ、父も思はず感涙一滴、常ながらそちが柔しくけなげなる心、今更に辭みたるわが言の恥かしや。汝れ稚きより父を敬ひ母を尊び、孝順の道踏まざ

るなく、孝養の行ひ盡くさゞる所なく、汝が十六年の赤心、我身にあまりておぼゆ。われ父となりて汝れに最早望む所なし。唯待つ所は、汝れが舅に仕へ夫にかしづきて、又孝貞の女子たる事にあり。舅氏をみとりて熱に仆るゝとも、汝は孝貞の女子とならバ、恨みなからむ。父も又孝子貞女の父とならむ、何の恨む事あらむ。はやはや行けよとて打ち悦ぶに、とき子は萬度父の恩を謝し、母の恵みを拜して、伯父の家に移り、誠の親に仕ふるがごと、衣帶を解かず寢食を忘れ、懇に介抱したるが、忠藏が病症は、遂に立ぬものなりけむ、左手に爲次郎の手を取り、右手にとき子をかき抱きて、孝養をよろこび、遺孤を頼みて、遂にあへなくなりぬ。

とき子は、誠の父に別れたるむかり、亡骸を抱きて泣き、棺の蓋を押さへて泣き、軒に立ちて泣き、門よ佇みて泣き、墓石にすがりて泣き、枕をまきて泣き、床をまきて泣き、形見の衣服着てはなき、手馴れし調度取りはて泣き、晝夜嘆きにかきくれ、涙にかきくらしたりといふ。それより、忠藏の遺孤をいつくしみて、あつくもりたつるさま、慈母も及バず。夫に仕へて婦道を盡くすさま、誠に貞節高く、暇あれバ實父をとひ繼母を見舞ひ、實母の墓に詣で、舅氏の塚に詣るを樂とするといふ。

とき子や、實に神州の眞女子、父母に仕へて柔しく、妹弟を導きて柔しく、舅氏に侍きて柔しく、夫にそひて柔しく、遺孤をあづかりてやさしく、眞に敷島の日本島山の、優にやさしくうつくしき女德を具へたる女子といふべし。特書して、富士の山光、芳野の花色、敷島の日本心と共に、天地に表し四海に誇らむとす。

故猪野忠行先生の母

岡部豊子

故學習院幹事猪野忠行先生は、天資篤孝道德高く、夙に、經史に通曉し、專ら、朱子の學を說く。又文に巧なり。品行は方正にして、容貌温然自ら古聖人の風あり。故芳野金陵先生、中村敬宇先生の如き大家も、亦大ひに之を愛敬せられたり。抑先生の學德爰に達したる起因を聞くに、是れ偶然の事にあらず。全く其幼時に於ける母の訓導宜しきを得たる爲なりかし。初先生の父は生方幸八とて、德川の御代盛りの頃四ヶ所の御厩最も繁榮なりしかバ、何れの土地よりか、流れ來りて、新橋の御厩に入りて、御馬飼と成り、馬蹄工を以て業とせり。其頭の御馬飼の風として、俠客肌を以て、賣り收入の都合少しく宜しき時は數多の無賴漢を乾分として家に養ひ

美酒佳肴、以て人を賑はし、博奕を以て常の樂となし、一度町内に火事、喧嘩等起るときは、我れ先きにと、電光石花の中へも飛んで入り。援弱挫强を旨とし、俗に謂命不知にて、最とも無邪氣の者なりけり。先生の父も、所謂親方株にて、「宵越しの錢は持たぬ」と云ふ意氣込の人なりけり。爰に先生の母は、名を某と云ふ、固より。然る人の妻なれど、身に何等の敎育とても無けれど、天性毅然として女丈夫の風あり。常に家に在りては、能く亂暴なる乾分共を鎭制し、又或る時は、夫に代りて火花を散らし、鮮血を流す暴爭の中に割入り、叱咜の一聲之を鎭撫す。子分の者皆敬慕す。斯かる境界に在りて、不思議にも、其子をして博學高德の大儒と席を同うせしめたる丹精の來歷こそ、苟くも育兒の道に注目する人々の活眼を以て觀察すべき所にこそ。

夫婦の間に二子あり。長を銀太郎と名づく、即先生の幼名なり。次を孝次郎と名づく、兄弟其の性質を異にす。先生は、幼時順柔沈着にして、恰かも鈍なるが如し。弟は性快活磊落にして、恰かも父の如くなり。時の御厩の頭鶴見七左衛門と云へるは、常に百余人の御馬乗御馬飼を支配して、人望頗る厚かりしが、古代日本流の馬

術に長じ、當代將軍の師範たり。又諸大名を始め、旗下の士の弟子たる者其數を知らず。然れども武事をのみ偏尊せず。身自ら書を能くし、又俳句を嗜しむ。古文人の風を愛し、學者を尊重す。隨つて氏の門には、高才の士出入多し、常に子弟を教導するに文事の修むべきを以てす。嘗つて銀太郎を見て母に告げて曰はく、彼の兒天性沈靜、敏ならずと雖ども、必らず一種特得の氣風あり、若し之を學界に導かば、後世大ひに爲す所あらんと。母甚く感じ、其の言葉を奉じ、勉めて先生をして父の業體に馴染せしめず。益其の温厚の質を養成し、機を得なば師を定めて就學せしめんとす。然れども家風前記の如くなれば、馬術とか、劍道とか、腕力にても研く事なれば、異論なきも、高尚なる學問の修業など、其の感覺を異にすれば、父は之が爲に古本だも買ひ與へざりき。母は種々工夫して、鶴見氏の助けを乞ひ。同氏が子弟の書籍を貰ひ受け、漸くにして先生を某師の門に入らしめたり。先生は毎朝書筴を負び師の許に通學す。年七八歳の頃なりけり。斯くて日月を重ぬるに隨ひ、其毎日歸り來るや、母は文机を出し、其の習得せし箇所を開きて、復讀せしむるに、一字一句をも覺知せざるのみか、其の何れの章まで敎授せられしやさへ、更らに感覺

なかりけり、是れ其の性質の多少記臆力に乏しきと、又其の生ひ立ちの磊々たる中に生長し、師の家に在る時のみ、文事の談話を耳にするも、已れが家よ歸り來れど、武術の優劣か、馬の好惡か、今日は斯樣々々の荒馬を乘り得しとか、何れの大爭を取抑へしとか。勇々しき事のみ見聞すれど。兎角其の學事志想を妨ぐるのみならず、我れも父等の爲す如き呑氣なる業をや爲し度き者との望さへ、時々胸中を騷がしけり。母は大に苦心して思ふ樣斯程まで丹精しても猶此の如きは如何なる者ぞ、所詮一と角の者と爲らんこと覺束なしと。其思ひ顏色に顯はるゝや。鶴見氏は之を慰さめ、決して汝落膽する勿れ、究竟彼の兒愚なるに非らず。習ひ性と成りたる者なれど、早晩其の端緒を了するを得ど、必らず進達する所あらんと、勉めて其心を勵ましけり。母は益心を勞し思ひを焦がし、何とかして天晴れの者と爲さずんば。鶴見氏の厚意に對しても何面目の有る可きぞと、大ひに奮勵の心を起し、樣々工夫を凝らしける、兎角するうち、師の方にても余りの事に所詮上達覺束なしとて。其の敎授を謝絕したり。先生の父は、之を聞き自から丹精なさんにも。何かせん、已れの性名さへ辨じ難き程なれど、如何とも詮術なく、果ては、却りて憤怒を生じ、空

竟我等如き者の子なれバ、其職業なる馬術にても達したらんには、事足るべきを、學問の道など成就せん事思ひも依らず。措きね措きねと叱りけり。先生も更らに記臆する事能はねど、兎角倦怠の心起り一念學に入らざりけり。時の大儒鹽谷先生は、博學高才にして、其の弟子を敎へて懇篤の聞え高かりければ、母は先生をして、再び此の門に入らしめたり。勿論這般は尋常の事にては叶ふまじと思案の末、一册の白紙本を造り、之れと矢立を携へ如何なる雪の朝も、嵐の日も、撓ゆむことなく、先生を送りて師の許に至り、先生が其日の稽古をど、一字一句皆平假字にて寫し取り、我家へ歸るや否や、之を出して、復習せしめ、自ら忘し所を敎へけり。斯くて一日の怠りなく、幾多の光陰を勉めけれど、始め大學より起り。中庸を經て。論語の半篇を寫し來りし頃。始めて學問の興味は先生の胸中に染入する事を得たりけん、翻然として悟り。愧然として恥ぢ。爾來母の勞を俟たず、自ら進んで學事に餘念なかりけり。母は大ひに喜び、欣然として、益勸學已まざりけり。鶴見氏も母の心入れを嘉みし、暇ある時は自からも丹精し、書籍萬端何くれとなく其勉學を助けたり。斯くて追々歳月を經過し、學力次第に發達するに付け。母は心

に思ふやう、我が家の業は、二男能く之れに熟錬すれど、生方の家名は弟に續がしめ、一男をバ、他家へ遣はし、充分學事を遂げしむるこそ。行末の爲め宜しからめと考へ、夫幸八に此の事を謀りけるに。固より空氣の人にしあれど、銀太郎の爲め好きとの事なれバ、我は弟を相手に我が業に爲す可れバ。汝は兄の爲めに盡くせよと、こそ云へ、平生の浪費多けれど、爲めに出金する事は能はざりき。母は何卒好き方向もがなと思ひけるうち、偶耳に入りしは。其頃は賣株とて小祿の家の相續者なきを、金子にて拂ふ事あり。(農商等の平民より、此株を買ひて、武士の列に入り後立身せし人數多あり。)折しも猪野と云へる御仲間の明株價二十金許りの者ありけり。家に一人の少女あるのみなりと。母之を聞き、奈何にもして、購はん者と之を鶴見氏に謀る。氏も大に先生の爲に、此擧を賛成し。金子若干を貸與す。母は此の助けを得て、早速手續を經て。此の株を求め先生をして此家に移らしめ、已も亦我が家の都合を整へ。補佐の爲此家に轉じたり。家なる娘をバ、行末我子に娶合せ。無き父母を祀らしめんと思へども、幼少より男女席を同うして生長するは、互ひに輕侮馴狎の習はしと成り、倫理を破る本なりとて、斷然少女を或る大家へ奉仕

せしめけり。心無き人々は、之を酷なりとして、批評する者あれども、固く取て動かず。之より先生は素讀吟味を終はり。益螢雪の勞を積み。內外共に學問修業の他更に二心なく、母は之を補けて、家計を整理し。先生の成業を娛しむ。母子の一念金石よりも固かりけれど、さしも困難なりし學問は、今は先生が無二の友となり、齡十七歲に至る頃はひには、諸史百家書一として讀まざるなく、詩に長じ、文に巧みにして、老成も三舍を避くる計りなり。而して、其の主領として修むる所は、朱子明德の敎を重んず。隨て品行芳バしく、親に孝。兄弟に友。師に順。朋友に信。實に諸家の門人中無比の少年とは成りにけり。此の年母は、更めて彼の少女を呼戻し。鶴見氏に乞ふて、媒介の勞を委ね、父幸八始め、弟をも招ぎ、祝言の式最と嚴かに行ひけり。先生は、天質柔和なる美少年なり。然るに嫁女は、時に十五歲なるが、如何にも見憎くき醜婦なりけれど、人皆後來必らず不和ならんと想像せしが、固より內に賢母ありて、義を守ること堅く、先生も亦善良の君子なれど、妻女は、姑を慕ひ夫を敬ひ、一家春日の暖なるが如く。最と睦まじく暮らしけり。先生の父も甚く喜び居たりしが、程なく、一陣の秋風に誘はれて、冥途の人とは成りにけり、二男

年未だ少なりければ、先生は之を我家に養ひけり、常に儉素を尊び、家風純朴。諂諛を事とせず、自から大家の門に屈從することなきも、自然其の德行と學力とは、身邊を照らし、未だ學問吟味をも終らざる頃より、人皆大ひに尊敬し、子弟を托する者夥し。諸藩の儒者老輩も、交を先生に結ぶ。先生能く舊恩を思ひ日々鶴見氏の門を訪ひ、其の起居を伺ふ、鶴見氏我が子の教導を托し、之を愛する父子の如し、日常我兒を誡めて曰く、汝等德を治めんと欲せバ、遠き古人をのみ之れ求めず、猪野先生の行爲を見よと、其の德思ふべし。母は先生を訓誨して曰はく、鶴見氏の恩、海嶽忘る可らずと。抑々先生の德行高きも故ある哉。終に學問吟味を終り、聖堂の教授方と爲り。追々進んで儒者次席まで昇進す。學愈明らかに、行益治まる。母は常に先生の心身を誡めて、怠るなく、終始一徹以て爰に至る。願ふよ先生にして、若し當初賢母の熱心なる丹精なかりせバ、如何に他人の補助あるとも、凡庸なる父の傍にありて、何んぞ此芳香の花を開くを得んや。此母ありて鶴見氏の佐けあり。二者備はりて、先生を出す、偶然天質の成す所にあらざるや明なり。身。中産以上に在りて相當の教育を受けし人なれバ。知らず、無教育なる一俠漢の妻にして、此の行ひ

ある、實に賢と云はずして何とか云はん。孟母三遷の教も、之を異國に求めずして、我邦先生の母あり。豈喜バしからずや。先生の母を敬愛する大方ならず、夏は寢所に自から團扇を取り、冬は爲に爐火を吹き。奉養至らざる所なかりしが、天數は人力の及ぶ所にあらず。明治改元の始つ方。不歸人となりぬ。先生の悲嘆は、何に譬へん由もなく、涙袖を乾す日もなかりけるが、是非なき事とて厚く野邊の送りを營みけり。以來先生は、彼の平假字の四書を佛前に置き朝夕活けるが如く仕へけり。偶〻人に語りて曰はく、我不肖忘古の心起る時は。母が遺身の此の書を拜し、常に心身の誡しめにすと。嗚呼先生の後代爲すありしも亦宜ある哉。此の母にして、先生あり。先生ありて、賢母の名益芳バし。豈近世の美談ならずや。

誰も見よ　いざよひの
みつれば　うらや
やがて　人の
かく月の　世の中

家政

看護法捷徑（四十二）

三笠舍主人

第五編　傳染病の心得方（つゞき）

（八）虎列羅（續き）

二　虎列羅は、極めて急性の病にして、重きは、數時間を不出して、忽ち死に歸するものなれバ、看護者たるものは、醫の治療を待つの暇なく、適當の救急法を、豫め熟知し置き、急に臨んで、變に應ずるの覺悟、無かるべからず、其法、概ね左の如し。

下痢、若くは吐瀉を發して、本病の疑あるものは、多量の温茶、若くは珈琲に、酒類を和したるもの、又は多量の温き葛湯、若くは山慈姑煎、又は赤葡萄酒を與ふべし。（毎十五分乃至三十分時位に、頻に與ふるを良とす。）患者若し冷水を望む時は、少量づゝ與ふべし。其外、水の代りに、氷を與ふべし。

身體冷却する時は、被衾を煖めて、十分に被包し、湯婆、温石、若くは、温めたる

糖嚢等にて、十分に四肢を温むべし。又温めたる毛布、若くは、「フラネル」(特に毛布を良とす。)に火酒、若くは樟腦精を浸して、頻りに四肢を摩擦するも良し、其外芥子泥、(前に出)を心窩に貼し、又は腹部に廣く之を貼すべし。

右等の方法を行ふ内、皮膚、又は舌尖に、温氣を生し、脉力稍復し、下利物再び便色を帶び、且尿通刺するに至れば、快復の望あるもの也。

三 虎列羅患者の室内には、看護人の外、決して他人を入らしむべからず。又他との交通を、嚴に斷つべし。

四 大便、其外病者に觸接したるものは、概ね左の法に依り、嚴に消毒法を行ふべし。

吐瀉物は、煆性石灰、若くは石灰乳、(煆性石灰一分を、水二十分に和して、乳狀と爲したるもの。)若くは粗製硫酸を加へて、(之等の藥を加ふるに、一定の法あり。其委しきは醫に質すべし)、攪和したる後、燒却するか、又は一定の土中に、深く埋むべし。

厠は、嚴に他人の上るを禁じ、厠内の糞便は、其百分に、石灰乳十分、若くは煆性石灰零、五分、(粗製石灰なれば、其に煆性石灰の五倍。)を加へて、攪和し、一週

日の間、嚴に閉鎖して、汲取らしむべからず。汲取りたる後は、糞壺、及其周圍に、石灰乳を撒布すべし。

被服、器具、家屋、室内、等の消毒方は、大抵腸窒扶私に同じ。

五 家内、若くは近隣に、虎列羅病發生する時は、衣服、飲食、其外總ての交通を遮斷し、一切其近傍に立寄るへからず。其外、酒食を節し、難消化物、及下利を與し易きもの、(例之バ、果實、未熟の麥酒、冷水等)を禁し、絨毛布等にて、常に腹部を温包すべし。

六 虎列羅流行の時は、僅かの下利と雖、等閑にせず、適宜に前に述へたる一時の處置を爲し、速に醫の診を請ふべし。輕少の下利といへども、虎列羅に變する事あり。

思へ世は
何のいさまか荒小田の
かへす〴〵もやすからぬ身を

漫録

あうむ文學（十）

楢の舍主人

俊頼卿の見識（つゞき）

げにときこゆるうた

こひしなん後は何せんいける身の
　ためこそ人はみまくほしけれ

ありはてぬ命まつまのほどばかり
　うきことしげく思はずもがな

ありへんとおもひもかけぬ世中の
　なか〱身をも恨みざりける

心ぐるしく、いとほしげあるうた、

さゝのくまひのくま川に駒とめて
　しばし水かへかげをだに見ん

夕やみはみちたど〱し月待ちて
　かへれ我せこそのまにも見ん

こゝろざしを見せんとよめるうた、

おはたゝのいたゝの橋の崩れなば
　けたより行かんこふな我せこ

山しろのこはたの里に馬はあれど
　君をおもへばかちはだしにて

おかしきふしあるうた、

うたゝねにこひしき人を夢にみて
　おきてさぐるになきぞ悲しき

枕よりあとよりこひのせめくれば

とこ中にこそおきゐられけれ

おびたゞしきふしあるうた、

なぞて吾うたゝある戀をし初けん

しどろに床のたちしろくまで

まてといふたちも留らで強て行く

駒のあしをれまへのたなはし

ひたぶるに聞ゆるうた、

梓ゆみおもはずにしていりぬるを

ひき留めてぞふすべかりける

やまかづのこけの衣はたゞひとへ

かさねはつらしいざ二人ねん

にくからで、人にわかれけりと聞ゆるうた、

忘れなんとおもふ心のつくからよ

ありしよりけに物ぞかなしき

わかでこそ思はん中はわかれなめ

そをだに後のわすれがたみに

おもひはなちたるやうにて、さすがにねぢけたるうた、

心ありてとふにはあらずよの中に

ありやなしやの聞まほしきぞ

たのめこし言の葉今はかへしてん

我身ふるればおきどころなし

女は、さうなと見ることをだに、あらがふにこそあれ。いとをしくおいふしたるうた、

人しれずたえなましかばわび乍も

なき名ぞとだにいはまし物を

無名ぞと人にはいひてありぬべし

こゝろのとはゞ如何こたへん

物心得たりときこゆるうた

螢のかるもにすむ虫のわれからと
ねをこそなかめ世をは恨みじ

大かたのわが身一つのうきかたに
なべての世をもうらみつる哉

おもひがけぬふしあるうた、

奥山にたてらましかはなぎさ漕ぐ
ふなきも今はもみぢ去なまし

はる霞かすみていにしかりかねは
今ぞなくなるあきゝりの上に

大かた、歌のふしは、ともかくもいひからなり。花をゝしみ、月をめづること、いくばくぞや。

身にかへてあやなく花をゝしむ哉
いけらバのちの春もこそあれ

まてと云にちらでし留る物ならば
何をさくらにおもひまさまじ

かやうにのみよむとおもふに、又散れとよみたる、ひがことゝも聞えず。

のこりなくちるぞめでたき櫻ばな
ありてよの中はてのうけれバ

櫻バなちらはちらなんちらずとて
ふるさと人のきても見なくに

はじめのうたは、世のはかなき事をいはんとて、花をもすてらるなめり。つぎのうたは、來ぬ人のうらめしさをいはんとて、花をすてられたるなめり。花をあくとよめるうた、

山ざくらあくまでいろを見つる哉
はなちるべくも風ふかぬよに

花をあくといはんこと、ありがたかりぬべけれども、めでたき世よは、風も吹かずといふものあれば、世をほめん料にいへば、げにと聞えたり、月なども又花のごとし。

あし引のやまのはいでゝ山のはに
　いるまで月をながめつるかな

あかなくにまだきも月の隠るゝか
　山のはふけて入れずもあら南

あやうに、山のはにけてなん、あるまじき事をさへ思ひよりてをしむに、

大かたは月をもめでしこれぞこの
　つもれば人のおいとなるもの

かくもよみけるは。されども、老のつもりぬることを憂へんとて、月をいとひたるにや。月のものいふものならましかば、あやまたずといはましものを。

てる月をまさきの綱によりかけて
　あかでわかるゝ君をとゞめん

これは、惟喬親王の清見にあそびけるが、月とともに入りなんとしけれど、業平の中將よめるうたなり。これは、月をまさきのつなして、ゆひとゞめんとよめるにや。さらど、月のためにいとほしく、かのみこも腹たちぬべきうた哉ときこゆれど、あかざるを、をしむこゝろの、あながちに深ければ、よきうたに用ゐたるなり。このこゝろは、いかどかりぞ知らんと聞ゆ。

見るからにうとましきかな月影の
　いたらぬ里もあらじと思へど

これは、あまねくてらすといふことの、まことなる故に、うとましといふも、めでたくこそきこゆれ。

しら雲にはねうちかわしとふ雁の
　數さへ見ゆるあきのよのつき

月は、わかくよむをめでたきことにすれど、この歌こそ　よきうたなんめれ。たゞし、この歌を物しりたる人は、月まことにくまなくとも、空をゆかん雁の、かげにうつるべからず。なほ、數さへといふべきなりといへども、つら〳〵、この事をおもふに、月まことに隈なけれども、空とぶ雁のかず、更に見えず。なほかげさへとこそ見なさめ。影といへば、今すこしとみゆるなり。されどかげといふべきなり。

照もせずくもりもはてぬ春のよの
　おぼろ月夜にしくものぞなき

かくもよめるは、花ちるめでたしといふこゝろばへか。鶯の歌に、

あら玉の年たちかへるあしたより
　またるゝものはうぐひすの聲

かやうに、よむとこそ思ふに、

竹近くよどこねはせじうぐひすの
　なく聲きけばあさいせられず

郭公のうたにも「行きやらで山路くらしつ」、とよめるとおもふに、

あつ山になくほとゝぎす心あらば
　物おもふわれに聲なきかせそ

かやうによむ心ぞへなめり。これは郭公のあく

にはあらず。物思ふをりきけど、いとゞなげきのまさるよしをいふなめり。

古人は、卿につきて、如何に觀察したるか。古人は、如何に卿の位置を定めたるか。今こゝに諸說を總合して、卿にかゝる批評の如何を知らしめんとす。まづ後鳥羽院は、俊賴堪能のものなり。歌すがた二樣によめり。うるはしくやさしきやうも、ことにおほく見ゆ。又、もみ〳〵と人は得よみおはせぬ樣なる姿もあり。この一樣、すなはち定家卿の庶幾するすがたなり。「うかりける人をはつせの山おろしよはげしかれとはいのらぬものを」、この姿なり。又、「うつらなくまのゝ入江の濱かせにをはなゝみよる秋の夕ぐれ」、うるはしき姿なり。と稱美したまひ、次に順德院は、基俊といふもの、この道の稽古ありて、俊賴にとき〴〵あらそふをりあり。然れバ、今の世まで、二の流たりといへども、その骨、俊賴に及ぶべからず。天下に肩をならぶるものなくて、俊賴數年をへたり。と定めたまひ、俊成卿は、俊惠は當世の上手なりき。されど、俊賴には及びがたし。俊賴は、隙なく思ひいたらぬくまなく、一かたならずよめるが、力もおよバぬなりといひ、定家卿も、彼朝臣は、すべて證歌をひかへ、道理をたゞして、歌をよまぬ人にて侍るなり。その身堪能いたりて、いひといふこと、みな秀歌の躰なり。師大納言の子にて、殊勝の歌よみ、父子二代、ならぶ人なきにたり。又年老いて後、いよ〳〵かたはらに人なしと思ひて、心のいづみのわくにまかせ、風情のよりくる

にしたがひて、おぢずはゞからず、いひつゞけたるが、そしりなんすべきことわりも思ひつゞけられず。あなおもしろ、かくこそいはめとみゆれど、時の人も、後の人も、ゆるしつれど、やがて先例證歌になりて、もちゐ侍るなり。そのほどにおもしろく、上手にみえざらん人は、おもひよるまじきことなり。「さくらあさのおふのうらなし」などいふ事、それよりさきゝ見およひ侍らぬものを、人のくせとおもひなして、信仰するばかりなり。されば、基俊公は、歌は俊頼に損せられぬるぞ。かれまねび給ふな。まんなの文字もかゝず、しりたることなきまゝに、わらはへのかたる事に付きて、無邊法界のいたづらごと、歌によみちらすものぞ。歌の外道なりとぞ、常に侍りける。亡父は、師匠

金吾のいはれしことなれど、歌をよまん人、俊頼をもどきては、三十一字は、いたずら事になりなんとぞ、申され侍りし。ならひたる人は、其短をみる。後の人は、このみにしたがふなりといひ、愚秘抄にも、さて〳〵、近來の好士には、基俊、俊頼、顯輔、清輔などにてぞ侍るらん。其中にも、俊頼朝臣は、生得の堪能とおぼえ侍り。基俊清輔などは、稽古の人にて、あやまりなかりし人なりき。俊頼は上手にて侍りしかども、あまりに雅意にまかせて、よみ侍るほどに、あるまじきことをつねによみいでて、人のそしりをおひけることたび〳〵なり。金吾などは、俊頼をぞ、赤子あどのやうに思はれたりけるとかや。たゞ俊頼のひがことには、先達よまぬことなれど、われと始ておも

ふさまに詠みいだして、わざけりをなされしたか りなり。それもいたく難ならずや。俊頼などがは じめてよみ出したらん、させるとが侍るまじ、父 の子なる上、世一の達者なり。恐らくは末世にも、 これは俊頼がよみたりしなどいひて、證歌にひか んこと、更に拙からぬ歌人とてこそおぼえ侍れ。但 かの歌をよく〳〵見る時に、見わきのするやうな る歌は、少々相交れりとぞ見え侍る。淸輔はなは 基俊よりもやさしきかたを、よみおほせてよみ侍 りけりと見ゆ。されども、たけたる姿は、基俊に、 は雲泥のおとりと申すべし。この三人のうた、是 非にまよひ、雌雄をさだめがたしといへり。二條 爲秀の如きも、詠歌のすがた、かゝる心むけをぞ、 俊頼の歌ざまを、本とまなぶなり。いかさまにも、

和歌は眼前只今さしむかひて、みたまふやうの躰 をはたらかさで、よみあらはすべきにや。「風ふけ ば蓮のうき葉に玉こえてすゞしくなりぬ日ぐらし の聲」、此歌は、はすのうき葉に玉こえてといひ出 づるに、はや涼しき躰は眼前なり。日くらしの聲 は、必しも、すゞしかるべき所詮はなけれども、 其時の景色を、少しもはたらかさずよみ出しつれ ば、歌の餘情になりたるなり。歌の餘情といふは これなり。このごとく、玉こえてなどといふは、 至極の上手の、まかも言きゝの德なるべし。わま さへ、おもひもかけざる、「すゞしくなりぬ日ぐら しの聲」とよみつゞけられたるを、天骨なくては 叶ふべからずとまで敬服せり。

連歌師猪苗代兼載の如きは、俊頼は最上の上手な

れども、飛過ぎたる歌多し。聞かずともなきつといはんほと〻ぎす人わらはれにならじとおもへど」、「聞きつとも誰にかたらんほと〻ぎすかげより外に人しなければ」、此體の歌、家集に多しといへり。

○才女逸話　山崎庚午

一、小野木家妻女、

細川幽齋侯の和歌の門人に、小野木縫殿助言といふ人あり、丹州福智山の城主なり、若年の頃より和歌を好みけるが、妻を娶らんとして、云ふやう、女は須く歌道に志あるものなるべし、と、遂に、古田織部の妹の、歌道に志厚きよしを聞きて之と縁を結びぬ、縫殿助言、小身にして且つ貧窮甚しかりしと雖、妻女少しも厭ふ色なく、よろづ、貞節を主としぬ、或日、この家に和歌の會を催す、小川土佐守、熊谷大膳亮、宇田下野守、木村宗八等あつまる、席定まりて、各々かたへを見れど、翠簾の掛りたる處ありて、さも雲上めきたる樣なり、いと、不審に思はれけるに、主人縫殿さていひけるやう、愚妻も御歌會の席末に連り申度よし申すにつき、かくしつらひて、翠簾のうちに罷り在り候、あはれ、御連中に加へ給はれかしと申しけれど、皆々、其志の深きを感じける、程なく歌、始まりて、食事時分に至りしかど、年の頃四十許の女、さもけなげなるが、翠簾の外に手をつかへ、今日の御客來に饗應し奉るべき品なし、如何はからひ申さんと有りしに、妻女とりあへず、

短冊に歌を書きて出されけり、折節春雨の降りけれど、

月さへも漏る宿なれば春雨の
　ふるまふ物もなかりける哉

やゝありて、黒く燒きこがしたる餅を反故につゝみ、杉揚枝を添へて引かれしとぞ、

某の人いはく、古風にして其道に志深く、即興の詠歌、感ずるに餘あり、貧究を屈托せずして、風流に心を馳する事、又ありがたし、總じて昔は、歌の會に餅を出だして、勝劣の賞にあたへしによりて、歌賃といふとも、又、內裏微々なりし頃、褐色の袴着たる男、小豆餅を箱に入れて、築地の邊を賣りありきけるに、女房たち是を呼びて、褐々と言ひしより、餅をかちんといふともいへり、よしや、それはともあれかくもあれ、只、其會席の嚴密にて風流を失はず、花奢を長せざる事、能々甘美すべし、　（雨窓閑話）

二、一休和尚の母、

一休和尚の母は、有名なる才女なり、そのまさに死せんとするにのぞみて、一休和尚に文を寄せ、遺言して曰はく、

我等娑婆の縁盡き無爲の都に赴き候御身よき出家に成り給ひ佛姓の見を磨き其眼より我等地獄に落るか落ざるか不斷添不添かを見給ふべし釋迦達磨をも奴となし給ふほどの人に成り給ひ候はゞ俗にても不苦候佛四十餘年說法し給ひ終りに一字不說と宣ひし也我と見我

と悟るか肝要に候何事も莫忘想あなかしこ

九月上旬　　不生不死身

千菊丸どのへ

かへす〴〵方便の説のみを守る人は糞虫と同じ事に候八萬の諸聖教をそらに讀みても佛性の見を磨かずんバ此文はどの事も解しがたかるへし

是とてもかりそめならぬ分れては
　かたみとも見よ水莖のあと

三、井上通女

通女は、讃岐丸龜の士、井上儀右衛門の女なり、幼にして聰慧、ふかく學を好み、讀書、歌文、一として通せざるなし、年十八にして、丸龜侯の大夫人の召すところとなり、頗ぶる寵遇をうく、ろのゝち大夫人に從ひて江都に行き、九年を經て歸る、旅中の紀行あり、江都へ行くときの有樣を敍せるを、東海紀行とし、歸る時の情想を寫せるを、歸家日記といふ、はじめ行く時、海上穩かならざりしかバ

　志るべせよ波間を分けて行く舟の
　　心しられぬやへのしほかせ

と歌よみけり、また、潮浪の音をきゝて、

乘寒一葉浮　倏忽過他州
風響驚鄉夢　波聲動旅愁
蒼々天與水　浩々月如流
枕袖蓬窓裡　不能只自羞

かつて盤珪和尚と佛道を論せし時、和歌を作りて巳れの意を述べて、

終にゆく道なれバこそ世をうみの
　海士ののりたる舟もたのまめ
といふ、のち丸龜の人、三田庄右衛門の妻となる、家集、往事集あり、

墓前にぬかつく子あり

横井知萬多

月山の端に傾きて、梟叫ぶ大木の陰に、何なる人の墓所ならむ。たてし志るしの木いと白く、闇にもそれと志るきは、葬りてまた幾日も經ざるならむ。其前に白き形したるかうこけり。何ならむと恐しさいはむかたなけれど、心を志づめて打まもれど、髪も志どろに亂したるか居たり。狐狸などのたわむわざするにかと、物かげにひそみてよく見てあれど、泣くが如く、訴ふるが如く、恨むが如き聲、いと微かにきこゆ。親にわかれたる人の志のぶにやあらむ。子に先立たれたる人のえ忘れぬにやあらむ。兄かはた妹か。何れにしてもこの墓にゆかりある人の詣でしなりけりと、やう／＼に心おちゐてもなほいぶかしきは、かく夜ふけてといふことなり。いでとひて見むと、立いでゝ聲かくれど、聞えざりしにや、顧もせずいらへもせざれバ、やゝ聲高くいひぬ。ゆくりなきにや驚きけむ、つと飛立ちぬ。おのれはさな驚きそ、某はあやしきものには侍らず、たゞかゝる眞夜中に詣でゐたまふがいぶかしさにとひ侍るなりといへバ、心おちゐしにやあらむ、志づかに跪きぬ。いとわかげなる女子なりけり。おのれいかなれどとひ

けれバ、此頃師なる人うせ給ひしに、あととふ人もなく、いと悲しさに夜なく〳〵忍び來て、弔ひまゐらするなりと、いふもはや涙聲なり。さる事にておはせしか、されど師の墓に詣づるに、いかでかしのび給ふ事あるべき、などてか晝來給はぬといへど、さる事に侍り、されど今數子たちは、こゝに詣でぬのみか妾が詣づるをわらひにくみて、くさ〳〵にあらぬことなどのゝしりさわぐが悲しければといふ。其心のわかき女にしては、理なりと思ひて、おのれも涕くましくなりぬ。梟も聲あはせて悲しふめり。さるにても、親はらから夫婦のなからひにても、この世を去りぬれど、知らざりし人の如く、墓などにまうでぬ人のみおほくなりゆく世の中に、この幼き人のかはかりにやさしき行あるは、師なりける人の教訓のいと懇ろに賢くおはしけるにか。さてもこの子ひとりなるを思へバ、なほさにはあらざりけらし。さてはいとしのびしく、この人のかはいと見まほしけれど、月は全くおち、闇はあやなくていとかひなきに、たきしめたる衣の香いと所せきまてなりや。

折々のいろ〳〵（一）

これは、中古の物語など讀みて、女の服色の、四季折々に、ことなる所あるを、さたかに、考へ合すべきえるべとも、且は、今の服裝の色どりする便ともなるべけれど、後成恩寺關白兼良公の書かれたる女官飾抄と云ふものをぞ、讀者の解し易からむためにと、眞字に書きかへ

て、此に載するになむ、

春冬のいろ〳〵

○皆紅ノ衣　紅の單　白キ表着　松重ノ小袖

○紅匂ノ衣上紅ニ薄紅ヲ重ヌ　紅梅の單　萠黄ノ表着　赤色ノ小袖

○紅ノ薄樣ウヘ紅ニ白キヲ重ヌ　白キ單　櫻ノ表着　蒲萄染ノ小袖

○紫匂ウヘ紫ニ薄紫ヲ重ヌ　紅ノ單　裏山吹ノ表着　萠黄ノ單

○紫ノ薄樣ウヘ紫ニ白キヲ重ヌ　白キ單　萠黄ノ表着　紅梅ノ小袖

○梅ノ衣オモテ白シウラ蘇芳　蘇芳ノ單　紅梅ノ表着　赤色ノ小袖

○莟紅梅オモテ紅梅ウラ蘇芳　青キ單　萠黄ノ表着　蒲萄染小袖

○裏倍ノ紅梅オモテ紅梅ウラ紅　倍リタル單　萠黄ノ表着　赤色ノ小袖

○紅梅重　紅ノ單　蒲萄染ノ表着　萠黄ノ小袖

○紅梅白ウヘ紅梅ニ薄紅梅ヲ重ヌ　倍リタル單　萠黄ノ表着　蒲萄染ノ小袖

○柳オモテ白ウラ青　紅ノ單　櫻萠黄ノ表着　赤色ノ小袖

○櫻重オモテ白クウラ赤花　紅ノ單　紅梅ノ表着　蘇芳ノ小袖

○山吹匂山吹ノ衣ニ黄ナル衣ヲ重ヌ　青キ單　萠黄ノ表着　蒲萄染ノ小袖

○花山吹（オモテ薄クチ葉ウラ黄色）　紅ノ單　裏山吹ノ表着
青キ小袿
○裏山吹（オモテ黄色ウラ紅）　青キ單　魚陵ノ表着
蒲萄染ノ小袿
○紅躑躅（ウラ薄紅）　青キ單　松重ノ表着
山吹ノ小袿
○躑躅（オモテ蘇芳ウラ青）
○藤重（オモテ薄紫ウラ青シ）　紅ノ單　裏山吹ノ表着
松重ノ小袿
○色々五（ウス色紅梅モエキスハウ山吹）　紅ノ單　紅梅ノ表着
萌黄ノ小袿
上白キ六（クレナ井ノコキウスキ一重アヲキコキウスキ一重ウスイロノコキウスキ一重ウヘトモニ七重也）
紅ノ單　蘇芳ノ表着　萌黄ノ小袿
○白薄様（ウヘモ重モ白キヲ云フニヤ）　白キ單　紅梅の表着
紅ノ小袿
○松重（オモテ青ウラ紫）　紅ノ單　萌黄の表着
蘇芳ノ小袿
○樺櫻（表蘇芳裏アカ花）　萌黄ノ單　櫻ノ表着
柳ノ小袿
○櫻萌黄（表萌木裏赤花）　紅ノ單　紅梅ノ表着
蘇芳ノ小袿
○蒲萄染ノ衣（表蘇芳裏ハナダ）　紅ノ單　萌黄ノ表着
紅梅ノ小袿

此内、梅、紅梅は、十一月の五節より、二月まで、櫻、山吹は、三月まで、藤は、三月四月ばかり、其外の色々は、時を不定候、四月には、あはせの衣にも、これらの色々を用候、きぬの地は唐織物二重也たゞの織物、あやな

にゝても、子細あるまじく候、常は、公私をゝしなべて、五衣にて候、其うち可然御方は、七も、八ツ、又十も、時によりて、かさねをれ候、只今の人は五より外はいたゝ用ゐ候はず、又うち〳〵は、きぬにひとへをかさね二三かさねたるも、子細なしと云々一二をも用なり、

○表着小袿なとは、二重織物、又堅織物をも可用にや、

忠孝二筋道

其九

渡部乙羽

武をもて其國を治むるは、たとへバ茂れる枝葉を苅りて、若木の幹を養ふ如く、文をもてその民を和するは、根を肥して、地の性に馴れしむるに似たり。されバ徳川家の政道今や全く其緒に就きて、國治り民和し、世は太平を謳ふ春となりけれバ、風俗は淳美となり、僞り飾る者も少うなりゆきて、堯舜の代とは斯かる時を云ふらむと、人々の許し合へるも道理なり。





別けて三代家光公、將軍の職を襲ぎてより、仁慈の政を布きて、民の塗炭を除かれける折なれバ、澤橋權太夫が大坂表にての嘆願も、直に御取上ありて、その仔細を役向の人して問はしめ給ひしに、主の爲めに遠島へ隨ひ行きし母を。子は孝ゆゑに戀ひ慕ひて、彼島にうち渡り、朝な夕なに冊きたしとの願ひ、不愍の儀なれども、國禁なれバ許し難し、さりながら孝は萬善の本といふなる、その優しき志を無にせむも本意ならず、他に思ひ替ゆべき筋もあらバ、憚らず申せとの御意、その御深切世に難有けれど、所詮思ひ切つたる御願、この事若し協はずバ、生きて各々樣へ顔向けはなりませぬと、屹としたる言分、彼は今ぞ花の盛りの年を、無殘と散らさんも惜しやと、再び詮議を遂げられしかど、一人の爲めに法を破るべきにあらねバ、重ねて仰出さるゝは、澤橋よしや一命を賭けて御願ひ申せバとて、島へ參ることは大法におゐてならぬ事なり、たゞ島より母を召返さるべし、其方母の島より歸るべきやう、文認めよとありけるを、澤橋は數度辭退し、そは有がたき御事なれど、申遣りても母はなか〳〵承知いたすまじ、たゞ仰出されたる儘、申越して見むとて、落つる涙を硯にうけて、文かきて遣はしけり。

別れてはたゞ故郷の音信のみ待たるゝものなるに、八丈島は波荒く路遥かなれど、京よりの便も絶えて、たゞ聞くものは千鳥の啼音、折からの月の夜に立浪の巖に砕けて、雪と散り雲と崩れ行く狀の、物凄きを見るばかり。青嵐松を吹きては、龍燈の沖に白きに驚き、靜江は若君を抱へまゐらせて、家に遁げ入ることもあり。此處にも初雁の一群、夕暮の空に啼き渡るよと見れど、苫屋の浦の秋寂びて、古松白沙の上にも哀れは知られけり。世の風物の淋びしきにつれて、思ひ出さるゝものは故郷にありける折の境界を、今の身に引較べて、涙を襤褸の袖に拭へば、若君は愛々しき顏して、乳母何故泣きやると宣ふ。いゑ、泣きはいたしませぬ、若樣の餘り健氣に遊ばすを見るにつけて、思はずも嬉し涙が溢れました、妾の悴の權太も今年は恰度十一、本國に若樣のお在ませば、兵太なんどがお供申して、それ竹馬よ、それ毬杖よと、お相手もいたしまする頃なれど、何を申しても彼地と此處とは、數百里も距たる土地なれば、御母君の御安否さへ知れませぬ、秋より冬の時候には、流行病も多しと聞けど、お異變も無きにやなど、年々歳々、故郷の事のみ思ひ煩ひて、安き心地も無かりしか、月日の逝くは早きものとて、何日過ぎしとも知らぬ間に、十

五六年の春秋を送りぬ。

住み馴れて尙は物憂きは、流されし人の身の上なり。冬近き日の夕暮は、波の上に遠時雨の音聞えて、浦の景色分明ならず、木葉半ば落ちては、鳥の塒に淋しく、夕陽山に沈みては、歸舟の沖を行くもの稀なり。

靜江は或日の暮近き頃、汀の石に腰うちかけて、沖の方を眺め居たりしが、思ひもかけぬ大船一艘、此方をさして漕ぎつけたり。時しも眞帆に孕める風の、颯々として岸を吹けば、その船の疾きこと、宛がら矢を射るに異ならねど、暫時にして近づきぬ。熟々見るに江戸表よりの御船なり、餘りの嬉しさに、聲張り上げて、皆の衆出合給へ、公の御船が參りたるぞ、嬉しき音信も知れ申さむ、早く來て荷など取下して手傳給はずやと云へば、家に居たる者共は、我先にと立出で丶、手を上げ足踏みして、悦び呼ぶぞ勇まし丶。

頓て船は岸に着きぬ、公より賜はりたる品を浮田殿に出し、さて後靜江にはその子權太夫よりの書狀を差出されたり、靜江は我子よりの來書と聞き、夢かとばかり驚きて、封押切つて讀み了るや、俄に眉根に皺を寄せ、齒を喰ひ切りて聲荒く。えッ

言甲斐無き悴が文通、逅か音信を聞きたるに、斯かる汚らはしき便りならで、愁じ物思ひの種なり、事もあらうにこの母に、お主を捨てゝ歸り給へ、一生の中一目逢ひ見たしとは、武士たる者の云ふべき辭か、えゝ不忠者、妾は寧そ口惜しうて、我子の文とは思はぬを、氣丈の目にも露時雨、忠と孝との袖垣に、からむ思ひの蔓を別ちかね、泣き崩るゝも哀れなり。靜江は屹と容を改め、かゝる未練な文を讀むも、若君樣に不忠となる、形見は却て仇なるぞ、それさへ無くば子とも思はぬ、思ひ出す日も無からうと、書状を引裂き、嚙み破り、海面きつとうち睨めて、雲低くして雨となるべき空の色、靜江の顏に凄さを添へぬ。

花菖蒲

千稻子

其十

長風にはためきて萎るゝとも見えざりし蝴蝶の旗印も、時運の狂瀾の爲に驅れて西海の波のまに〳〵浮沈する時となる。

洛都は濃煙の中に瓦解して徒に悲酸なる跡を留め、輪奐の美しさも散り行く灰燼の内に消ゑて慘憺たる光景と變りに變れど、哀々の涙を揮ひて弔ふ者もあらず。悽愴の氣は獨り四邊に蟠りて星の光のみ唯に我身を震はしむ。此後は如何に成行くらん、天を捲き來る海嘯の如き吾妻夷の馬の蹄に愈荒れて、年月を經行くまゝに、松桂の枝に梟巣ひて蘭菊の叢に狐藏るゝの慘狀を表し、蓬生は傾きし軒を爭ひて匍ひ登り、葎は門を閉して淺間しき淺茅原となりやせん。秋風枯荻に音信れて尾花の打靡く影寒く、石上舊き都は此處なりけりと後の世の人の語草となりやせん。悲しくも百年の都は一朝の焰に黒み渡る。

哀れ拙き平家の方々の命運なるかな、思はざりきかく俄に沒落の哀を留めんとは、嗚呼天涯の孤客となりて腰刀を枕に代へ、無念の腕を撫して徒らに長大息するの哀痛を見んとは。先ッ年福原に都代へをせし時さへ、故鄕を戀ふる紅涙を注ぎしものを、まして今は家を燒きて妻子に別れ、我が生れ我が育ちし都の地を遠く離れ、東西に漂泊しつゝ渺茫萬里見渡す天は廣しといへども、何れの方にか適歸せん、我等が行先は何處白波の岩打つ音に昔の夢を破られ、怒濤に搖らるゝ海松甲斐なき身と落魄せ

んとす。思ひ廻せど涙は灘の如く流れて胸中は千斷に裂き刻まる。

北國より、立噪ぎくる猛嵐の如き源氏の爲に逼られて、內大臣殿は恐こくも幼帝を守護しまつり、一族を率ゐて忍びやかに都を落ち給ふ。誰か哀別の涙なからんや、皆後髮引戻さるゝ心地して幾度か都の方を顧れど、曉風に欲れて遙に黑煙は彼方の空を包み、焔火は明方の天を燒きて勢凄しく登る。之を見て皆諸共に相顧み、思はず直垂の袖を絞りて冬ならぬ時雨降り勝る。

漸くに思返して又步めば、風冷かに面を拂ひて亂髮を櫛り、秋の初の虫の聲は哀を誘ふて斷腸の苦しみを催しむ。乘りたる主のみか物辨へぬ馬さへも、都の地を離れ難きにやあらん、足搔遲々として折々鬣を震はしつ、都の天を望むで悲しげに嘶ふ聲寥し。

東の空はの〱と明行きて物の黑白もやゝ辨へ得る頃。一騎あり蕭々として行く。卯花威の鎧に赤地の錦の直垂を着て、栗毛の駒の逞しげなるに跨り、獨り列に遅れたるにやあらん足搔を早めて其跡を追ふ。

流石に留め難き感慨に胸中を裂るゝと見え、都の地を出でて小松ヶ原に差かゝる時、

暫し馬を起てゝ後を顧み、涙に滿ちたる眸子を上げて都の方を望みつ悵然たる事久し、稍ありて獨り呟き云ふ。我等遠く此地を去りて又何時の日か見らるべきぞ、人生は常なきものなりとは云へ、俄に萬里の長風に俯仰する身とならんとは思はざりき。御門を擁しまつりたるとも此都の地を離れては何かせん、我一族は此都の地と共に長へに朽ちんと思ひしものを、敵の兵共の幾萬人寄せ來るとも都を守護して全じ枕に快き決心を示さんと思ひしものを。情なきは大殿の御心かな。かゝる場合にも我父の申上げし詞を用ひ給はず、諸人の諫めまつるも容れさせ給はず、をめ〳〵と生を偸みて後の世の人の笑を遺し、萬世我族の名を汚さんとは、さりとて今は如何と詮なし、此後は再び荒れに荒れたる此地を復し、我族の衰運を輓回せんと務むるのみ。思ひ廻せば世は墓なき物かな。それにつけて母上は事なく落ち給ひつらんか、菖蒲の身は其後如何になりゆきつらん、口惜しきは常に行違ひて一度も逢ふ事能はざりしにぞある。我身の此地を落ち行きしと聞かば嘆きもせん悲しみもせん、最早生きては再び廻り逢ふ事難かるべし、思へバ淺き緣にてありけり。

かく云ひて顏を外向けつゝ、密に鎧の袂を揮ふを見るに、昔しの淸らに白かりし面

影は戰場の風雨の爲に酷く窶れ、涼しき眸子は湧き出る血涙の爲に酷く曇る。やがて女々しき事なりきと思ひ返し、徐ろに手綱を繰りて馬首を返しつ、悄々として歩み出せど、胸中の憂憤は留め難きにやあらん、折々身を震はして俯仰すれば、直垂の袂は痛く濡りて朽ちなんとかり。嗚呼、知章、身は平家の華冑に生れて、心魂は忠と孝との二物に壘まれ、常に人の一本平の花月に嘯きて徒らに情の爲に實を奪はるゝを慨嘆し、自らは筆を投じて長戟を震ひ管を折りて長劔を摩し、志は頑として堅き事金鐵の如し。一度關東の警を聞いて蹶然として起ち、二度北國の亂を聞いて父に軍に從ひて馬を陣頭に起つる事數度。晝は兵に先ちて敵陣を馬の蹄に破り、夜は篝火の瞬く下に鎧を抱いて兵と共に相談笑もす。孤雁一聲冷かなる夢を破るの時、月の影幔幕を漏れて枕頭を撫するの折、獨り懷舊の淚を絞りて掌に胸を打つこと幾度。

かくて源行家の兵を退けて都に歸れば、越路の守り破れて義仲の軍は潮の如く襲ひ來る。滿廷驚慌して狼狽へる事甚しく、遂に百年の計を誤りて都落の議起る。

それ遂に如何。知盛卿の切齒して極諫するも用ひられず。皆弓矢を荷なひて悄然と

して帝都を去る。知章は無念の涙を拭りて平家の運盡きたりと叫ぶ。さりとて獨り踏み留まるべくもあらねば、諸人に遲れて母を送りまつりて告別を述べ、今方々の跡を追ひ行くなり。

泌々として湧き出る多くの感慨に馬の足搔自ら遲く、遙に列におくれたるを忘れて頭を俯して沈思しつゝ行く。やがて松原の半に來らんとする頃、自ら我心を叱咤して猛然として首を擧げ、長息しつゝ大空を仰ぎ見れど、早く東の天は全く明け離れて松の葉に結びたる白露は玲瓏として珠玉の如く明らかに、咲き亂れたる路傍の女郎花は、なまめかしき顏を上げて路行く人の袖を扣へんとす。女にも劣りたる我心なり。耻かしきかな此有樣を見たる人やあらざらしかと顧みすれば、我後に從ひて歩む一人の婦女あり。酷く痿えたる白き被着を面深く纏ひて細き竹の枝を杖となし、深き思ひに沈みつゝ疲れたる事甚しき者の如し。知章は目を留めてつら〳〵に打眺れど、彼方も顏を擡げて此方を見遣りて暫し立止り、やがて徐ろに側近く進み來りつ、思もかけず白き腕をあげて駒の鐙を執り、袂に面を覆ひて潸然として涕泣す。

似たりしと思ひしに菖蒲にてありしか、懐しや逢ひたかりしよと云ひ、鞍を飛び離れて其手を握りつゝ、顔を打護りて愀然たる事やゝ久しく、暫くは互に言葉もあらず。只恩愛の熱涙は雨の如く落つ。松の梢の珠玉も風に亂れて一層の露けさをませり。

文林

雨後月　　近衛　忠熈

月のため晴たるあめとおもふまで
雲間に見ゆるかげのさやけさ

くれゆく空に月いでたり　　東久世通禧

ともし火の影に背きてこのゆふべ
くまなき空のつきをみるかな　　鍋島　直大

くれわたる山松かげにかゝやきて
今ころのぼれあきのよのつき　　前田　利嗣

わが岡の松の木のまにあらはれて
みる〱空にのぼるつきかな　　前田　利鬯

さしのぼる月にゆづりて山のはに

ひかりをさまる夕つく日かな

高崎　正風

暮はてゝいろなくなりし白くもの
ひまみえそめて月は出にけり

宮地　嚴夫

むら鳥ねぐらにかへる山のはの
松をはなれてつきは出にけり

坂　正臣

うち薫る軒のかつらの木の間より
月かげみえて日はくれにけり

小出　粲

大空のなかばはつきになりにけり
いり日のなごり猶にほひつゝ

谷　勤

中々にねぐらやすまどふやまがらす
このまさやけき月のひかりに

植松　有經

夕つく日にほひ殘るとみしほどに
月のかげこそさしわたりけれ

大口　鯛二

夕月夜ほのめきそめつ日くらしの
こゑなほ殘るもりのこずゑに

西川須賀雄

立秋

風ふれて一つ散りたるきりのはよ
秋をことはるけさのしらつゆ

糸山　貞幹

虫

うき秋の夕へはたれもかなしきを
我のみがほにむしのなくらん

松下納涼　石丸忠胤

住の江の波のよる〳〵ゆきかよひ
すゞみしてこん松のしたかげ

夏朝　三浦千春

清水わく青葉のかげのあさすゞみ
夏はゆふべとなにおもひけん

夜納涼　林甕臣

あつし暑しあつしと喘きあへぎしを
おもへばけふの晝にざりける

杜納涼　柴田顯光

身にしみてすゞしかりけり鳴蟬の
聲のみなつのころも手のもり

阿立阿際　佐々豐水

北の海ゆきにてはりよみがきけん
こゝろのかゞみ光さやけし

避暑　藤野隆道

都びとともにこしきてはこねやま
こかげすゞしく過すなつかな

或人の新室祝に　千日亮

春夏のなかをへだてぬきみか家は
いつものどけき風やふくらん

故松尾多勢子刀自のいへにて藤懸松といふことを　近藤政寛

かひなしや池のみぎはの松が枝に
よせてかへらぬ藤なみのはな

月前納涼　篠原政韻

よひ〳〵に光をましててるつきに
むかふ夕はなつともしもなし

くれゆく空に月いでたり　鍋島　榮子

雲ながらくるゝと思ひし山の端よ
出でたる月のかげのさやけさ　蜂須賀隨子

秋風になびくをばなのすゑくれて
はのめきわたるゆふ月のかげ　前田　朗子

山のはしさだかならねど暮れ渡る
空さやかにもいでしつきかな　柳原　愛子

むら烏ねぐらあらそふこゑの内に
松をはなるゝやまのはのつき　松平　健子

はな薄ひとりまねくとおもひしに
くるゝまがきにつきは出に鳧　小池　道子

夕日さす雲のはたてをまもるまに
山のはたかくつきはのぼりぬ　北島以登子

むら鳥のねぐらあらそふ聲たえて
靜かにのぼるつきのかげかな　鳥尾　廣子

足曳のやまもとくらくなるなへに
雲間はなれてつきは出にけり　小笠原艶子

今はとて歸らんとするあきの野の
うしろの山につきはでにけり　鶴　久子

夕闇をおぼつかなくもたどるまに
行みちみえてつきぞいでたる
服部　磯子

露こめてくるゝと思ひしおほぞらの
やがても月になりにけるかな

庭夏草
諏訪　晴子

庭の面におひしげりたるなつくさの
わたり涼しくかぜわたるなり

蓮露
尾崎すう子

むすびおかんこの蓮葉の白つゆに
消えての後もおなじうてなと

古城梅雨
師岡須賀子

今もなほみかさまされる梅雨に
むかしをしのぶたかまつの城

松下泉
河野　文子

松かげの清水がもとにたちよれば
むすばぬ袖もすゞしかりけり

納涼を詠める歌幷短歌
海上　壽子

五百枝刺千歳へぬべき　松蔭にたゝずみ居れば
山風のすゞしく吹きて　谷水のきよくながれて
わが心すが〳〵しくも　かくしつゝ日こそ暮行
むす苔をむしろとなし　いはが根を枕にまきて
かた待に待てし居れば　うれしくも光かゝよふ
つきたちのぼる

短歌

蟬の羽のころもうすしと思ふまじ

吹かせすゝしまつのしたかげ

清きなぎさ　井上頼文

伊勢の海の清きなぎさと謡ひけむ、古歌の心をへをとりて、神宮皇學館てふまなびのやに、おふしたてたる若竹の、若き學生らが、かきつめたる歌文どもをとりて、貴社に投ず。抑、この學びの屋はしも、故神宮祭主朝彦親王殿下の、畏き御心よりなりたちしを、明治十まり八年、鹿島ぬしの宮司に任けられしより、ます／＼規摸をおし擴められきとぞ。敎頭下田義天類氏、専、心を盡して、君にまめに、國にうつくしみの心をふかめしめ、大和魂をやしなひたて、且、ねもごろに國文國語ののりをさへ、敎へ導かれしかバ、其のあゆみを進む事も著しろく、見つべき歌文も、いと多かり、大和魂をやしなひたてられたるからに、唯、苟且にかきすさびたる歌文にだに、世の敎へ草となりぬべき、はた、すくなからず。さかはあれ共、こゝに摘みいでつる文の内には、わざあきをさな語、いさましき軍物語は更にて、小說めきたるも、又、なきに非ず。とは輕薄浮華なるつくり物語をのみ、めではやす、世人たちにも示して、やや／＼に、誠しき道にも入らしむべき、たづきともなれかし。日ながのねむりざましに、かたくるしき學びの文はふさはずなどいふ人の爲にもなれかし、との心しらひなりかし。

おひつぎて、いふ。つぎ／＼に擧ぐる歌文共の内には、ひげにかひなでのをもまじへぬべければ、

文意をさなくなり整はぬもありぬべし。されどひとふしありと覺ゆるは皆掲くべし。又課題にもあらで、おのがし丶、心々のすさびにものせるもあり。されど、下田氏の筆を加へぬもさはなり。今年きさらぎの頃よりは、ますく學びやののりをおしひろめ、三橋、長屋の兩氏も、專ら學びの園の若草、おふしたつる業にいたづかる丶事とはなりぬ。さはいへ、未、稚けなくなり調はぬ、或は、心餘りありて、詞足らざるなど、みなことぐに、正しかねたるもあり。いはむや、課題の外に、物せる文の澤なるをや。されど、自、玉石混淆は免かれ難き事なりかし。玉も、貝も、なのりもまじらむは、つみ拾ふろのをりくの、さちくにてぞ。

清少納言

神宮皇學館生徒　松本呂三

春のごとき御世にあひて、花なす文筆をふるひ、香爐峰の雪に、心の底を光らせて、千載ののち、その匂なほ香ばし。その學のひろき、そのオのふかき、褒むるにあまり有り。しかはあれども、于定國が門の心たかぶり、さよ衣のつまを重ね、登良男ならぬ女の身とて、人を人とも思はざりしは、いと惜むべき女なりけり。この褒むべき所をしむべきふしにまされりや。惜むべき所、ほむべきふしに劣らずや。凡、女のたふとむべきは、すなをなると、操たゞしきとに有り。いかに、才學ありたらむとも、すなはならず、操たゞしからざらむに

は、尊むべき女には有らざるなり。おのれ、こゝに至りて、いとゞおとゞが行を惜まざるべからず。あはれ。女子よ。世の女子よ。才と學とは、香爐峰の雪のふかゝらむことをねがひたまはむも、ゆめ、于定國が門の高ぶる行をなまねびそ。是、すぎにし清原のおとゞが爲に、いひいでたるにはにはあらずぞかし。

伊勢まゐりの記

何　たに子

ことし、二月九日、伊勢の神宮にまゐらんとて、ふみ子、武らをも、引つれて、あるじの君にまたがひつゝ出たつ。この日、そらはれわたりて、いとうらゝかなれど、

朝ばらけねくらはなるゝ鳥ならで
　まづわか心とびたちにけり

午前六時に、須磨より、汽車にのりて、程なく、神戸につく。こゝにて、東路よりくる、車にのりかへて、大坂をへて、京都へゆく。此をり、にはかに、汽車のこみあへれば、なにゆゑならんときくに、けふは、初午にて、稲荷の社に參る人々なりといへり。さて、かの稲荷山を望むに、一方ならぬ賑ひにて、山は、人もて、きづきたらんやうにみゆ。

うらうらとかすみたなびく稲荷山
　山かひとかとおどろかれけり

大津につく。比良の山に、雪のつもりたるいと清し。

雪ふかき比良の峯おろし寒けれど
　大津の里はかすみこめたり
比良のねはましろなれども水海の
　みどりは春のけしきなりけり
さゞ波や大津のさとははるながら
　比良の高ねはゆきぞつもれる
せたの長はしを過るころ
我ひねもとゞろくまでに音たてゝ
　早もすぎゆく瀬田のながはし

三雲、鈴鹿山にかゝれる頃、日のかげはさしながら、雪のふりいでゝ、風さへはげしければ、かの、坂はてる〳〵といふ小うたをおもひいでゝ、
　時の間にはれくもりして鈴鹿山
　いまも昔のけしきなりけり

柘植、関をへて、龜山にいたる。こゝより、此度、ひらけつる、參宮鐵道にのりかへて一身田、津松坂をすぎて、宮川につく。こゝより、滊車を下りて、こたびは、手車にて、山田へゆく。此時、午後、五時ばかりなり。津、松坂あたりは、家のつくりもよく、いづれも、奥ゆかしく見ゆ。昔より、伊勢は津でもつとさへいへる處なれど、さだめて、繁華なるべし。されど、今より、後は、鐵道のために、いかゞなりゆくらん。それに引かへて、山田は、皆人のやどりつく處なれど、繁昌いはんかたなし。わがとまりたるやどは、十文字屋といふ。古市の音頭踊さかんなり。案内いたすべしなどすすめたれど、あまりつかれたれど、ゆかず。
十日、天氣よし。朝とく、外宮にまゐり、次に內

宮にまゐる。宮司の廳よ申て御神樂の奉納をこふ。神官三人ばかり、とりゐの外にたちて、出むかへたれど、打つれだちて、宮にまうづ。

千早ふる神の宮居のきよければ
心さへにもあらたまりけり

まきつめし眞砂にひたとひざまつき
ひれふすばかりたふとかりけり

夫より神樂殿に至る。十四五ばかりなるをとめのさげ髮したるが緋袴に白き水干を着て出たるはいと清くいと美し。

糸竹のしらべのどけき神あそび
むかしを今にみるこゝちして

そなへ奉りし物などいたゞきて、まかりいづ。かくて、うぢ橋のある亭に、しばしいこひて、猶、

二見の浦へ行。こゝよりは、うら道なればちかきよしいへれど、一里ほどもあらん、夕五時ばかり、二見の若松屋といふやどにつく。先に、五十鈴川のほとりにて、

五十鈴川水上遠くしたひきて
くめは心もすゞしかりけり

五十鈴川きしゆく水のきよければ
あゆのはしるも底にみえけり

かの名高き二つの岩を見んとて、海邊にゆくをり、引しほなりければ、岩根まで、よくみえたり。大なる方は高さ二丈九尺餘、めぐり百三十尺。小なる方は高さ一丈二尺、めぐり三十尺餘ありとぞ、岩にかけたる繩、いと〳〵ふとやかにて、小のかた、あまりよちいさけなれど、にわはしから

ず、ゑなどに、かきてあるかた、はるかに、まさりたるやうに覺ゆ。

二見なる岩と岩とのいもとせは
けに動きなきちぎりなりけり

十一日、天氣よし。朝日のいづる頃こゝを出てすまの浦にかへりしは、夕五時頃なり。

たまくしけふたみの浦に旅寢して
神代のまゝのあさ日をぞ見る

またこんをりのしをりにもと、ありのまゝを、しるしおくになん。時は、明治の廿七年二月なり。何のたに子

梅雨の頃すゝろことを

田邊わけ子

雨をいとふは、世の常なれど、うら／＼と、霞にこめて、ふるあめは、はなの、ひもとくよすがともなりて、中／＼に、をかし。土さへさくる、夏の日の、たへがたき折しも、なる神の音して、ゆくりなく、降いでたる夕立は、たかき、いやしき、誰かはめでざらむ。秋の村雨は、木々の梢を染わたす、たつた姫を助け、冬は、ふりみふらずみ、打しぐれて、釜の音にかよひたる、いひしらずえんなり。なべての雨の中にも、夏の始めつかたは、火桶にもよらず、花よ、心のあくがるゝこともなくて、降つゞきたる梅雨に、とふ人もなければ、おのづから、いとまありて、ふづくゑにむかひ、ふ

みなど繰かへしつゝ、見ぬ世の人を友としたるは、こよなうたのしきかぎりなりけり。窓より、吹いるゝ風に、橘のゆかしくかをりたる、又、たとしへなく、身にしむばかり哀なり。夜は、野にも、山にも、心をやらで、つれ〴〵と、雨の音のみ聞き、て、寝やのふすま、なごやかに、引かつぎ、軒のいと水くりかへし、昔の事ども、夢にむすびたる、いかで、こしかた戀しからざらむ。すべて、おのが心のおのれにありて、なべての事も、身にしむばかり、哀におぼゆるは、雨ふりつゞきたる頃にぞあなる。一年のうち、晴間なく、ふりたらむこそ、いとはしきこゝちもせめ、世に、雨ばかり、まめやかに、なつかしきものは、あらじかしとおもふも、例の、引たがへたるこゝろなりや。

祭母靈文

女子高等師範學校 鳥羽まつ枝

けふはいね給はん、明日は起きいで給はんと、まちにまちしかひもなく、御いたづきの、日にさへ重りゆきて、うからやからを殘しおきて、まかりましかば、はなやかに昇る朝日は、我が家には、かげをけち、梅が枝に、こづたふ鳥も、我が宿には、歌をとゞめず、うらめしとも、かなしとも、いはんすべをしらず。この後は、なにを樂にながらへん。たれと共にかかたらはん。浪にたゞよふ捨小舟、ひく人もなきわが身をぞ、たれによざして、まかりいませし。うらめしとも、かなしもいはんすべを知らず。あはれ、わが名を召したまひし御聲は、尚、耳の底に殘れるに、今は、こぞ

なる世に住み給ふか。思へば〳〵、うれたきことこの限になん。今はと見奉りし際までも、仕へ奉りしわが身だに、孝養の足らざりしをうらみ悔ゆるの外なきものを、遠き國々にわかつるうからやからのなげくも、うべなりや。

月日重りゆくまゝに、かなしき事もいでくべく、年月積りゆくにつけて、淋しきこともぞまさるべき。この後は、春秋のうるはしき色も、山川の清き眺も、たれとともにかめで遊ばん。世にいまそつる折は、うからやからをわく心なく、ひろくあつく惠みたまひ、家の内の萬のまつりごと、よる晝といはず、思ひはかり給ひつれど、たれも〳〵、たのもしく思ひし間に、忽に、世をまかり給ひぬれど、何事も、ゆめのたびぢを行くこゝちして、かなしみつきせず。今日は、靈の御前に仕へまつらんとて、身を清め、かしこみうやまひて、常に好ませ給ひつる菓子、魚、さゝげまつるを、あはれときこしめし、隔てぬ家人の、御まつりつかうまつる圓居のむしろを、樂しと見そなはして、うけ納めさせ給へと、おくれし雁の音になきつゝも、かしこみて申す。

月前のほとゝぎす

女子高等師範學校　松井郁

卯月ばかり、日一日、ふりくらしたる雨の、よひのほどにやみて、月かげ、さやかにさしいでたるに、せんさいの卯花の咲きこぼれたるが、露の光

きらめきし、いみじうをかし。まだしきほどの聲をきかむやと、打ちずんじつゝ、例の文机に打ちむかひたるに、それかあらぬかとばかり、いと、はのかなるを、ひが耳にやと、はしに出で、空をあふぎ見るに、あまたゝび、いとさやかに、名のりたる、たとしへなく、あはれなり。ほとゝぎすは、いたく、なく音を惜しむ鳥なりとか。いにしへ人もいひつるを、かむかりもなくものかなと、うれしき事、いふもおろかになん。さるは、此の宿のよしある木立に、こゝろやとまりつらんかし。

雜報

●皇后宮には、去る五日、在京の陸軍將官へ、鮮氷詰一籠づゝを下し賜せられ、暑中の勤務を憐ませ給へりとぞ承はりぬ。いとも、畏き、大御心にこそ。

●小松宮御息所には、日本赤十字社篤志看護婦人會の幹事長にてあらせ給ふを以て、今回の事件に就き、傷兵救護の事を、親しく、會員に諭し給ひし由、其の趣意は左の如し。

今回朝鮮の事變よりして我が國と淸國との和平遂に破れ止事を得ず宣戰の詔勅を下したまふの不幸にいたりぬされバ君に忠にして戰に勇なるわが帝國軍人は戰闘の勢に

當り海に陸に激戰數回にわたりて敵の負傷者數多かりしはいふまでもなくわが兵士も多少はまぬかれざりし事なるべし是等の爲にはかねて陸軍衛生部の設ありまたわが赤十字社救護員も廣島豫備病院の勤務に付隨したれバ治療看護にもれめなきは疑ふべくもあらねどなほいまより後戰のなりゆきによりては幾何の負傷者を增さんもはかりがたくさらんにはその苦惱はたゞ創傷のみにとゞまらず燒くが如き炎熱に如何にして堪へ得べきや是をおもひかれをおもへバまことに片時も坐視するに忍びざるはわれも人もかはる事なかるべしかゝる折にこそ年頃わが組織したる篤志看護婦人會の志はつらぬく時なれ故にわれは奮て實地につきて親しく患者を慰めかたはら看護婦を勵ましてちからのおよぶかぎりはその苦を輕くし猶一方にありては適當なる物品を贈りて敬愛の心をしらしめんとすされバかねておもふ所を會員のかた〴〵につげおきてもろともに心をあはせ其志をつらぬかん事を望むになむ

●華族女學校　は、暑中休暇中の心得を、生徒の父兄一般へ向け、發して、其の休業中、家庭の注意を嚴にせしめたりといふ。其の文に、

暑中休暇は一般の慣習にて學校までも休業することゝなれり學校の休業は炎熱の氣候勉學の衞生に害あらんことを恐るゝ故なるべし此際健康上掛念ある兒童に在ては力めて運動して外氣に觸れ衞生專一なるべきも健康なる兒童朝夕の冷

氣に乘じ課業の復習をなすが如きは必しも衛生に害あらざるべし夫故にや地方の小學校などにては休業日限を短縮せるため少からず年齢の稍長じたる生徒は此休業日限を徒費せぬ樣心掛もあることながら小學生徒など休業を口實とし游嬉にのみ日を送るならば短き時間の廢學に同じく敎育上不利なることなるべしされバ家庭に於て令嬢方の衛生に御注意の上適宜復習の御世話にも御注意ありたし

明治二十七年七月　華族女學校

とあり、吾人は、此の趣意の實行せられんことを、深く、希望して、止まざるになん。

●京都高等女學校の恤兵　同校の卒業生の組織なる鷗沂會にては、此際在韓の軍人を恤まん爲に、一人二十錢程の金を出し、金巾の肌襦袢を調製して、之を恤兵部に献納することに決め、最早五百餘名の出金者ありとの事にて、其の裁縫は、來十一日より在京の生徒を同校に集めて之を爲さしむる由なり。斯かる事聞くに就きても、吾が國民の忠誠なることそ喜しけれ。

●感すべき少女　鳥取縣日野郡茶屋尋常小學校生徒岸本ます(十一年)といへるは、止み難き事情よりして、子守を申し付けられしに、それより、稚兒を脊負ひて、日に學校に登り、五十餘日に至りしも、少も、倦み怠ることなく、益、勉强せりとされど、同校の職員始め、村吏員一同、之を賞して、生徒の模範とも、爲すべきことゝて、書物を與へて、之を表せりとぞ、聞きぬ。實に、憐に感

すべき少女にこそ。

●名刀を授けて孫を勵ます　伊勢の國久居の舊藩士にて門閥の聞えありし三好兵右衛門といへるが孫に、收といふは、先頃、尋常中學校に入學し、其の後、徵兵適齢にて、第三師團に入營し、現に、服役中なるが、日淸の事變一朝危きに至りなむ、同師團よりも、出兵せらるゝ筈にて、收も、また、いつ渡韓せんやも知り難けれむとて、其の事を鄕里なる祖母の許に、細々と言遣しに、祖母はいたく打喜び、兵士の名をあげんは、此の時にこそあれ、故鄕の事など、な憂ひそ、心を專にし、國の爲に盡せよかしと、返し訓へ、收が日頃、所望せし、祖先傳來の名刀を、今こそ渡すべければ、天晴家の名をも起すべしと申添へたりしといふ。あはれ、古の賢婦人にも愧ぬ訓言にこそ。

●貞婦　先頃賞賜を受けたるは、左の人々なりき。

栃木縣那須郡湯津上村大字佐良土平民
郡司新之丞妻　ね　つ

平素夫に仕へ貞實殊に明治十五年夫新之丞脫疽病に罹り遂に兩足を切斷し起臥自由を失ふや當時子女三人猶幼弱家計益貧困に陷るも毫も屈撓せす躬自ら傭役若しくは行商に從事し僅に得る處の資を以て夫に嗜好の物を供し又時として夫を脊負ひ近傍山野を逍遙し其病苦を慰め看護懇篤到らざるなし其志操を變せざる玆に十有餘年一日の如し洵に奇特とす仍て其賞として金三圓下賜す

三重縣桑名郡桑名町大字矢田積士族

富永鐐太妻　せん

幼にして父を喪ひしが資性温順にして善く其母に事へしも不幸にして年十三又母を喪ひ遂に依據を失して外戚の養ふ所と爲り以來外祖父母叔母に事へて孝養至らざるなし而して其外祖母叔母は共に長病に臥せしにせんは單身之に侍養し晝夜湯藥衣服飲食より起臥の看護に至るまで懇切到らざるなく或は時に病者を負ひて街衢に出て病鬱を散せしむる等十六年一日の如く而して二母逝きし後は能く外祖父に事へて定省承歡到らざるなし其志行洵に奇特とす仍て其賞として金五圓下賜す

●年酒舎　七月別會の分は、左の如し。

七月一日別會

當座競點探題

天 小中村甲 鈴木乙 澤邊螢　河合きさ子

ねぬなはの浮葉のひまに影みえて　數さへさはにとぶほたるかな

地 鈴木甲 雨後蓮　増山み雪子

夕だちのはれし名殘のまらつゆの　ちるも涼しきいけのはちすは

人 小中村乙 夏眺野　梅村宣雄

沖津風まはにうけつゝゆくふねは　とほくみるだに涼しかりけり

佳調 小中村丙 夏虫　佐々木信綱

何ならぬ山にはわれもつどひては
つゝみなくやすちからあり鳧

鈴木丙夏野。　宮木ませ子

むらきえの雪間にみえし落くさも
ふみわけかたき夏の野邊かな

蓮露　前田利聲

朝風はふきわたれどもはちすはに
おきたる露はこぼれざりけり

夏朝　水野忠敬

とく起ておりたつ庭にこゝちよく
かよふ風さへなつとしもなし

杜蟬　大河内一子

夕立のはれまもまちえてなくせみの
こゑも涼しきころもてのもり

夏旅　小中村清矩

なつの野の小草の露のおきいでゝ
わさゆく旅ぞたもとすゞしき

水邊夏草　加藤安彦

流れゆく水のみどりもみえぬまで
みねの夏草しげりあひにけり

待秋　佐々木古信

老いぬれど心みじかくなるまゝに
秋まちどほくおもほゆるかな

夏風　井上頼國

垣本のくさむのつゆのちる見ねて
わたるもすゞし夏のゆふかせ

深山泉　三浦千春

山ふかみ夏ともしらぬいはかねに
わきてすゞしきまつのした水

百合　櫻井尚保

よやすくすさん心かひさしくも
まつがいはねに姫ゆりのさく

竹間夏月　鈴木 重信

くれ竹の葉ごとにおけるしら露も
さやかにみえて月にすゞしき

夏舟　千野 眞韋

かへるさに扇わすれてきたりけり
月もすみだのかはふねのうち

夏日長　深見 愛子

より〱は柳のもとにたちよらん
あつき日がけの長きものから

夏瀧　後藤かね子

たちよれバ衣手さむしたにかげに
涼しくおつるたきのしらいと

夏井　飯田いね子

たちよりてくむ袖すゞし夏ふかき
板井のみすにあきやすむらん

夏海邊　宮田 道子

浦風によせくるなみはたかくとも
いざやひろはんなつわすれ貝

夏夕　諏訪 晴子

雨すぎて涼しきかぜをまつかげに
つきすみのぼる夏のゆふぐれ

蚊遣火　諏訪 忠元

竹垣のへだてもあらぬかやりびに
わか宿さへもふしよかりけり

●又同例會の分は左の如し。

年廼舍

七月兼題　名所夕立

雲かゝるみのゝなか山とくすぎて　津輕 承昭
ゆふだちすなりかさぬひの里

大江山こえていくのをゆふだちの　南部 利剛
あめのあしとくふりすぎに鳧

鳴神のおとはきこえてつくはやま　みえずなりゆくゆふだちの空　前田　利聲

さしてゆく笠井の里にかゝりけり　なつのをわらふゆふだちの雨　水野　忠敬

鳴神のおともはるかにきこゑきて　ゆふだちすなりみやぎのゝ原　太田原一清

雲の峯いまはくつるとみるほどに　わしたのはらにかゝるゆふ立　増山　正治

雲かゝるひえの山かせふきおろし　にほのうみつら夕だちのふる　鈴木　重嶺

武藏野の今ははてさへみゆれども　ゆくてわびしく夕だちのふる　小中村清矩

川こゑてくる人しばしたゑにけり　わへのいちゝのゆふだちの雨　井上　賴國

みわの山ふるかとみれど過ゆきぬ　しるしはかりのゆふだちの雨　鈴木　弘恭

夕立はこはまのさとにかゝりけり　かち人いまやたちさわぐらん　加藤　安彦

しかま川濁るはかりはふりもせで　うみにいでけりゆふだちの雨　佐々木古信

夕立のふりすてゝゆくすゝがやま　なごり涼しきまつかぜぞふく　梅村　宜雄

鳴神のおとはのやまはかきくれて　せきのこなたに夕だちぞふる　三浦　千春

夕立のわめにぬれつゝしづのめが　ぬのとりいるゝたまかはの里　和田　耘甫

いかほねに入日はみえてとね川の　かはのせくらく夕だちのふる　佐々木信綱

みるが内にふしの高ねは雲たちて　夕だちすなりみほのまつむら　青木　修

鳴神のおともはけしきゆふだちに　すみだのわたりひとさわぐ也　上杉　義順

梓ゆみいるのにかゝるゆふだちの　櫻井　尙保
雨はやよりもとくすぎにけり

入ひさすかたのははれて夕だちの　豊田　三叔
めぐるもひろきむさしの丶原

風をはふおきなみたかくもろ船も　渡邊　信古
やませにはしるゆふだちの空

ふじかねは雲のあなたに現はれて　川島　宗端
ゆふだちすなりうきしまが原

中空にそびえてみゆるふじのねを　中橋　隆美
しばしかくして夕だちのふる

鳴神のひゞきのなたのゆふだちに　朝倉　馨
あはぢしまやまみねわかぬ哉

田子の浦やゆふたつ雲のなみまより　服部　貞一
みるめみにしむふじのしら雪

雷のおともひゞきてますらをの　鈴木　重信
ゆつきのそかに夕だちのふる

水上はゆふだちすらしすみだがは　千野　眞草
みのきてくだすふねもあり鬼

海の面はあとなく晴てゆふだちの　諏訪　忠誠
くものゆくへやあの丶まつ原

俄にもくもまちさわぎかさはやの　諏訪　忠元
うらべにかゝるゆふだちの雨

（以下次號）

教の庭

八月五日兼題　野露

（天地人の外は原稿到着の順なり）

天

玉しきのにはもかくやと思ふまで　岡山縣窪屋郡倉敷町　大橋廣江
のべのくさ葉にむすぶしら露

地

照る月のかげをそはりて匂ふかな　愛媛縣新居郡大町村　藥師寺芳子
たまなす野邊のもゝくさの露

人

秋の野の千ぐさの上におくつゆは　長野縣長野町　横敷たか子
千々の音になく虫のなみだか

秋の野のくさ葉におけるしら露は　片岡光子
むすびもとめぬ玉かとぞ見る

秋の野の草の葉ごとにおくつゆは　青木春子
くも井の星のおちしかと思ふ

秋の野は千草のはなのいろ〳〵に　石井德子
つゆのしら玉おきわたすなり

白玉とひとや見るらんゆふつゆの　平野君子
のべの千ぐさに月ぞうつれる

萱野ひめかざしの玉とみゆばかり　佐々有鄰子
おくこそわたせあきのゆふ露

草むらの露わけころもきて見れば　澤田春子
のぢのしの原たまぞちりしく

八千草の花のさま〳〵おきつゆの　德永萬壽子
いろめづらしき秋の野べかな

秋の野は千草につゆのたまなして　德永輝子
つきも葉末にやどりけるかな

秋さればおきそふつゆに深くさの　千々波橘子
のべの哀れはいやまさりけり

月かげと見まがふばかり廣き野に　大橋　兼子
　ところせきまでおけるしら露

武藏野にやどれる虫もこゝろせよ　相賀　金子
　あすはきえゆく露のいのちを

露のたまつらぬきとめよ武藏野に　岸本　槌子
　すみゆく月をしばしやどさん

朝まだき秋野のをぐさ分け行けば　國武ます子
　おきそふつゆに袖ぞぬれける

秋の野をふきくる風にこぼるなり　井出　信子
　くさの葉末のつゆのしらたま

夕まぐれ秋の野すゑにきて見れば　杉本　芳子
　つゆのむすばぬ草なかりけり

おひ茂げる草より草につらなりて　竹内美枝子
　涼しき玉はつゆにぞありける

野邊ごとにむすびあまりて我袖の　河野　文子
　うへにもしげき秋のゆふつゆ

秋の野に吹きしく風のはげしさに　三木ちと子
　たまとみだれて露ぞちりしく

朝風にゆらくもすゝしはぎの葉に　菅谷こう子
　きら〳〵見ゆる露のしらたま

いみじくも露ぞおきける秋の野に　瀬戸さと子
　草かるしづのぬれそぼつまで

旅人のやどりやいかにいそぐらん　岡部　豊子
　そではしわへぬ野路のゆふ露

取りて見ん千草の花のいろ〳〵を　羽田三緒子
　の〻朝つゆにそではぬるとも

百千草たわむばかりにおきにけり　香川　頴子
　かぜもそよかぬ野路のゆふ露

秋の野の花におくつゆしげけれど　土生　濟子
　をらぬ袖さへかつぬれにけり

置ばちりちれどまたおく秋の野の　上野　兼子
　ちぐさの上のつゆぞをかしき

吹く風にみだるゝ野べの露見れど　高井　米子
　そでさへしめる秋のゆふぐれ

おなじ野におく白露のいかなれば　野尻　鶴子
　秋のみひとのそでぬらすらん

玉ならばひろひても見む秋の野の　碓井　信子
　あさ茅の上におけるしらつゆ

名もわかぬ小草に迄もおきそひて　つきかげやどす野邊のしら露　碓井武子

武藏野の草葉におけるしらつゆは　つきのひかりに玉と見ゆなり　碓井和可子

山の端に澄みのぼりたる月かげを　やどして消し野邊のしらつゆ　磯部つや子

有明のつきのひかりのてりそひて　かせに玉ちる野邊のしらつゆ　岡佐波子

雨晴れて雲間に見ゆるつきかげを　うけて涼しき野路のしらつゆ　長山てい子

鳴き渡る雁のなみだかおきわする　くさの葉末の野べのしらつゆ　吉田たけ子

鳴く虫の聲のあはれにそふものは　ふかくなりゆく野べのしら露　吉田芳子

をしかなく野をわけゆけど白露の　草のたもとにかゝらぬはなし　永井さい子

野邊毎の千草にむすぶしらつゆや　かづ〳〵秋のあはれみすらん　植木鋼子

秋の野はたゞしつけさの勝りつゝ　川瀬茂子

朝日さす千草のつゆやいろ〳〵の　はなとも見ゆる秋の野邊かな　川瀬菊子

澄む月に野邊のしば生の露しげみ　なく虫の音もしづかにぞきく　水谷清子

うら葉かれ虫の音よはる秋の野は　露こそつきのやどりなりけれ　柳茂子

おきわたす晨のつゆにうちぬれて　千草のはなのいろぞまされる　高橋政子

置けどちり散れバ且置わたし野の　もろき露こそ世のすがたなれ　高橋千代子

秋の野の千草のはなのいろ〳〵に　あさゆふおける露のしらたま　山田咲子

さを鹿の分けやしぬらん跡みえて　結びし野邊のつゆぞみだるゝ　藤澤元子

照月のかげをやどしゝあきの野の　ちくさのつゆに風わたるなり　内藤清子

たち寄れど錦かと見るみやぎ野の　草のたもともわきはつゆけし　渡邊益子

を鹿なく野中のはぎにおくつゆは　加納　嘉子
　ふれぬ袖までかゝりぬるかな

千草さく野邊見渡せどしらたまの　明石　榮子
　つゆのにほひをこぼしつる哉

風にちる草葉のつゆを見るだにも　池田さい子
　すゞしく渡る小野のほそみち

見渡せば千草のはなにいろそへて　望月　静子
　ひかり玉なす野邊のしらつゆ

朝な〳〵野邊の千くさにおく露や　小原　里子
　月のかつらのしづくなるらん

朝な〳〵野邊の千草もなびくなり　笠原よし子
　たまと見まがふ露のおもりて

秋くれどいとゞかなしく思ふなり　大槻かをる
　しもとなりゆく野邊の白つゆ

眺むれば秋のけしきになりにけり　熊谷あや子
　のべの千草はつゆにたはみて

秋くれば朝な〳〵に消ぬやすき　淵井　富子
　くさの上におく野邊のしら露

鳴きわかす虫の涙のかずをおほみ　堀江　鈴子
　あさの野原はつゆけかるらん

秋の野におき渡す露はかはらまし　堀江　京子
　ちさくのはなの色にそむれど

夕日かげをつるをまちて秋の野の　大橋てい子
　くさ葉にのぼるつゆのしら玉

おく露のひかりもきよきひろ野原　伊達富貴子
　猶すみわたるあきの夜のつき

露しげき野中のみちをわけゆけば　江馬　信子
　わがころも手に玉ぞちりぬる

夕されど月もやどすとはなの上に　隆田　槇子
　おきまさりたる野邊のしら露

みめぐみの露深き野のなでしこも　青羽しげゑ
　嵐ふく日をかこつなるらん

野に出でゝ民の苦しきわざみつゝ　兒玉　玉子
　めぐみのつゆに袖しぼりける

此處の草かしこの萩とおきそめて　瀬戸　春子
　野面はつゆとなりにけるかな

眞萩咲ひくまの野邊を來て見れど　諏訪　晴子
　おく露ふかくなれるあきかな

哀れてふ事はすゝきに志られけり　阿南 艮子
よいにやどりしわけの志ら露

風吹けば玉やちるらんわきの野の　阿南 圭子
くさ葉にやどる露のかずく／＼

小男鹿の妻とふたひにみだれけり　篠原美能子
さが野の奥のはきの志たつゆ

いつのまに置ともなしに草の葉に　神田 靜子
結びわまれるのべの志らつゆ

百草の志げれる野邊を分けくれば　溝口 信子
そてにもすそにつけそ含める

秋の野のあしたの露もさくはなの　溝口 惠子
ちぐさの色におきわたしけり

八月五日兼題　琴を聞く

天　府下芝區三田四國町　師岡千代子

月のいみじうあかき夜ひとり家にのみあらんもさうぐ／＼しくて淺茅生の露いかならんとたちいづるにおきわたせる道の邊の光いひしらぬに虫の音の

哀もそひておもはえずたどり行くにはるかに聞ゆるは琴の音なりいづれの緒よりといひけむことのは思ひ出でゝなつかしさにとめゆけむ軒の木立などものふりて心にくゝすみなしたる家ありけり思のほかの心地して立うかゞへどいと愛たれ處女のすみわたる月にむかひて打とけ彈くなりけりそのしらべのめでたきは秋のみ山の松風にかよひつと言ひしうひことのねもおもひ出られて空にすみゆく月の山の端にかたぶくも知らできゝほれてなむ

地　廣島市稻荷町　香川 穎子

今宵しも例の文机に向ひて何くれの復習に餘念なかりしが虫の音いと滋う時計の音もいとすみて聞ゆるからに夜もいたく更けぬらんとおぼえて左右を窺へど家人は皆靜まりぬいざ我も寢なんと取散らしたる書どもをさめなどする折しもあれ軒の松風につれて哀れに妙なる琴の音のきこゆれど誰が心すさびにかとそゞろに床しくてやをら庭におり立てば月は中天に漂ひて光り物凄きまでに冴え渡

れりさては彼の人この光を愛で丶にやとなほも耳をかたむくれバ音は愈々すみまさりていと丶身にしみて覺えぬあはれこの妙なる調べには天津少女も舞ひやせむ愛でたき手ぶりにはひそめる龍も躍り出ましなど聞き居る折しも一つらの鴈の月の面を鳴き渡るにあはれは一しほ深くなりて如何でかは人の心の動かざらむさては新田の左中將の君が内侍の艶聲にひかされて心あこがれ給ひけむもげにもとおぼえてなん

人

千葉縣佐倉　宮小路　植木鋼子

初秋の空晴渡り月影に玉かと見ゆる草葉の露打拂ひ訪人もなき柴の戸に今霄はいと珍らしう物の音を聞ゆるこは此近きわたりに別莊しつらひ公務の暇ある毎來りて遊び給へるやことなきかたの手すさひに調ふる和琴にやあらんしつけき夜半の更行まゝ峯の松風庭の筧の流れの音も通ふかと心なき心も澄渡り身はいつしかに仙人の遊ふてふ境にか入ぬやとうたがはる實に琴の音の餘韻深き春の夜頃雲井の花に調べてますらをの心を動かしうき秋を嵯峨野の月に彈して再び都に迎へられしためしもありき是等の妙手は聞人も又常ならぬにやされどたとへしらへはつたなくとも自然の風調いと高く餘韻に情のこまやかなる萬の糸竹はあれどいつれか琴の音にしくべきと己の心に感ずるまゝをかくなむ

佐々有隣子

夕月の影なつかしくさし入てふきくる風の音きよく心もともにすみわたりたるをりからつまちかねしきぬたならぬねやのとはるかにたがかきなす小琴にかつま音ゆかしく二十五げん夜月にたんせしと中がきの隣よりもずんじてとりどりのおもしろき風情を都の人にきかせましかむと思ものからすてもおかれず文つくるとはなしに只ことをのみ筆にまかせて

菅谷こう子

鶯の囀を聞くものたれかは愉快の感を生せざら

ん鳥の叫聲をきくものたれかまた嫌惡の情おこらざらんこれらの音聲の意をしりてにはあらで唯その音聲をきくのみにて然るなりしかはあれどももし其哢囀のいづれの意なるかをしることを得ば其感のふかきいかにぞやうたふ聲のやさしきいもいはれぬ琴の音などは亦かくなんあるべき其音を聞くのみにしてすでに壯快優美嚴肅悲哀などのおもひありされど其歌詞の意をしりて其歌を唱るの感深きに較べなばいづれか優いづれか劣世のものしりを待たで解しうべし文明社會の心耳を敬服するものは音樂に超過するものなしと然らば人生の自然の嗜好として聖人君子の愛翫すべきものたるをしれりわらはは此琴と云へる美妙の音聲は人をして優美の心術愉快の感動をなさしむるの外なほ世益上よいくたのしるしを保持することを知れるになむ

岡部　豊子

瀧野川に夕すゞみのかへるさそらもきよう晴れ渡り細き流れにまどかなる月を泛べてすが〳〵し淵の柳の葉をあはせ風にもまれて眠るさへいとさみしき心地して連れなる人ともろともに家路を急ぐ折しもわれいづこともなき瓜琴のしらべぞ妙にきこえける耳かたむくれば大原のむかしを忍ぶ小督の曲にて糸の音色もいとほそく浮世はなれし思ひをしも知るや知らずや草むらにすだく松虫鈴虫やきり〳〵すさへ聲絶えて恨みの音をとゞめしは奈何なる淑女のすさびにやもろこし文に傳へ聞く卓文君が樂曲の流れを汲める人にもや都はづれし所から袖とめられしこそ怪しう口をしけれ

碓井和可子

ある夕つ方月ののぼり出るをゐながらながめ見むやとて庭の眞中に臺どもまうけかぞいろたちと腰うちかけゐつる折しも隣の家なる幼子の手もかろく雲井にもひゞく如き聲打たてゝかきならす吾妻琴の妙なるは木の間よりもれ出る月影の庭の草葉にてりそひて白露のきらめくより一しほをかしくめでたくなまめかしかくするうちいつしか琴の音は止みて月はます〳〵高うのぼり彼方の山近うか

たぶき初めたればいと口をしく床よつきぬれどさきのゆかしき琴の音は今なほ耳につきてなか／＼忘れられざりき

岡　さは子

ひと夜風は晝間の暑さを消すばかりにそよ吹きもち月はさえわたりいかにも快く覺えつれど此淸き月を家の内にのみ居て見んより近きわたりをそゞろありきして涼みがてらにみましかど又一しほのながめならんと心へだてぬ友垣一人二人さそひ母妹などと共に程遠からぬ畑道にぞ出でにける畑には數多の綿粟さては野菜物など處せきまで植ゑわたしてそが葉における露に月の光りのはえわたりて風に亂るゝ樣恰も玉を飛す樣にて涼しさも一しほにていはんかたなしかゝるをりしもそよと北の方より吹き來る風に聞ゆる琴の音のいとも／＼たへなるに一同顔を見合せぬ續きていよ／＼よく聞ゆるにいで近く行きて聞かましと其音を知るべにそが垣根近く行きけるに未だ齢重ねぬ少女子にやあらん愛らしき聲と共にかなづる音いとたへなれば手に持てる扇の落つるも心付かで聞き居たり實にや琴は心猛き武者の心をも和らげ物の哀れを知らざるしこ人の心をも感せしむるとかやされば女子たるものは必しも心得居らまほしき道にこそと打語らひつゝ夜もいたく更けぬれば惜しき音を後になして月に送られつゝ家に歸りぬ

永山てい子

文よみつかれしうたゝねのねざめにきくはとゝぎすさへいとうれしきをましておのが好める琴の音のをかしきを聞てはいかでたゞやはあるべきつゆふみわけてとめくれど月影すゞしくすめる流れにうかぶ一ひらの小舟のうきふししげきくれ竹の世の夏もよそなる遊にたがしらふるにや松風のしらべ芦間の水鳥のこゑにかよひていとしめやかなり實にことごとしきこまもろこしのがくよりも東遊のといひけんもさる理なるめりとそゞろにいにしへのしのばれてなむ

吉田　芳子

いづこも同じと云ひけむ秋の哀はさるものから片

山里やいかならむと夜もいたくふけぬる頃宿を立ち出てそこはかとなくさまよひあるく程遙にさそふ松風に琴の音のゆかしう通ひたる思ふ方にやあらむと尙たどり行けば光さやけき淺茅露聲なつかしき叢の虫何れも哀をそへざるはなしやう／＼聞きわかれて歩みよればきりかけたつものめくらしたる家の高殿にてほのかにしらぶるなりけりいかなる人のすさひならむとしばし佇む折しも俄に雲かくるゝ月も心ありげにて哀なりや

隆田　槇子

秋は名のみ立ちて晝のほどは殘りの暑さ堪へがたけれバ一と日の夕つ方より中垣隔てぬ友の許を驚かしけりさてこゝは大きなるけだかき家居にてさなきだに涼しげなる庭の面にやり水いたうちて風そよ／＼と吹き來り涼しさ云はん方なしこの景色をながめつゝ互に萬の物話などする内ふと透垣のあなたよりゆかしき琴の音聞ゑてければいと似つかはしき折のよと喜びつゝ耳をそばだつるに吉備樂となんいへる樂にて壽永のむかし熊谷直實が平の敦盛のきみをうちまゐらすところのみしらべなりけれど餘まりのあはれさおもしろさに物語をば置きてきけりげに敦盛のきみの心ばへ熊谷の心のやさしさ雄々しさながら當時にあひてそのありさまを見る心地して覺えず袂をぞしぼりけるをりしも雲なき空に月のぼりて庭をてらしたるけはひげに筆にもことにも盡しがたうなん

兼題

八月廿日
- 歌　庭萩
- 文　秋田家

九月五日
- 歌　初雁
- 文　疾を訪ふ文

女鑑第六十七號目次

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京**銀座**郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑　毎月貳回五日廿日發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治廿七年八月十四日印刷
同　年同月十五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同　編輯人　山根勇藏
同　發行所　國光社

（印刷所　東京國光社印刷部）

（明治二十四年八月八日內務省許可）